

『雨夜の喜劇』

遠藤雷太

《登場人物》

- 片桐 光一 30歳 小劇場系劇団の看板役者。女好き。
片桐 夕矢 27歳 光一の弟。パティシエ。ケーキ屋に勤めている。
片桐 藤実 33歳 夕矢の妻。
片桐 潤一郎 65歳 光一・夕矢の父。道東の田舎町で薬局を営む。心臓にペースメーカーをつけている。
片桐 ゆかり 54歳 光一・夕矢の母。ケータイ端末を毛嫌いしている。
田辺 葵 33歳 光一の劇団の制作。元役者志望。
立花 亜希子 24歳 大学生。光一のいまの彼女。
赤石 良太 32歳 夕矢・藤実夫妻の住むマンションのお隣さん。兄弟二人暮し。警察官。
赤石 道雄 30歳 夕矢・藤実夫妻の住むマンションのお隣さん。兄弟二人暮し。医大生。

《場所》

札幌郊外にあるマンションの一室。居間。
舞台手前上手側にはベランダ。夜なのでカーテン。
居間中央に二人がけのソファ。
舞台奥上手より玄関とトイレに通じる廊下（上手側に伸びるが客席からは見えない）。
舞台奥下手よりドアがあり、寝室に通じる。
寝室は客席からも一部見えるくらい。
舞台手前下手から台所、風呂場（客席からは見えない）へ出入りできる。

《時間》

ある夏の日の夜。七時ごろ。

光一は居間をうろろしながらスマホで話中。
藤実 はソファで雑誌を読んでいる。

光一 え？ だから、今日夕矢のところでもシ食うからって。なんで？ 来いよ。急じやないって。何度もメールしたって。え。来てない？ 送ったって。何度も。送ったって！ メール。とにかく来いって。場所はわかる？ そうそう、五階建ての建物だから。四〇一。早くおいで。じゃあな。(電話を切る) …なんだよ。

藤実 彼女？

光一 (強引に藤実の隣に座る。ちよつと甘えた口調で) そうなんだよ。

藤実 なにを揉めたの？

光一 何度も誘ったのに、知らなかったって言うんだよ。

藤実 今日のこと？

光一 うん。どうしてだと思う。

藤実 さあ。

光一 なーんか最近、機嫌悪いんだよなあ。

藤実 浮気がばれたんじゃないの？

光一 まさか。(藤実を見つめて) 誰と浮気なんか？

藤実 光一さん、もてるから。

光一 意地悪だな。藤実さん。

藤実 と光一、くすくす笑う。

台所から夕矢が出てくる。

夕矢 おい！ なにやってんだ！

光一 (わざとらしく驚く) 夕矢！ いたの？

夕矢 いたよ、ずっと！ 気づいてたくせに。

光一 いやあ、全然。ねー。

藤実 そうね。

夕矢 藤実さんも。冗談はそのへんにしてください。

藤実 (にっこり) あら、ごめんなさい。

夕矢 頼むよ。ほんとに。

光一 夕矢。…怒りすぎだよ。

夕矢 怒りすぎじゃないよ！ …まったく、ほんと女なら見境がないんだな。

光一 そんなことないよ。藤実ちゃん、いいじゃない。(腕をまわそうとする)

藤実 (軽くかわす)

光一 あら。

夕矢 そういう意味じゃないんだよ！ 兄ちゃんは、いいと思ったら実の弟の嫁にまで手を

出すのかってこと！

光一 だからそんなに怒るなよ。冗談に決まってるだろ。冗談。ねえ！？

藤実 もちろん。

夕矢 本当だろうな！？

光一 少なくとも今のところは。ねー。

藤実 (苦笑い)

夕矢 兄ちゃん！！

光一 だから怒りすぎなんだよ、おまえは！

夕矢 怒るだろ、普通は！

光一 ほんと頭固いなあ。

夕矢 兄ちゃんの頭がふにやふにやなんだよ。

光一 おまえの頭がカチカチなの！

夕矢 そもそもな。兄ちゃんはウチに来すぎなんだよ。

光一 しょうがないだろ。おまえの方がいい暮らししてるんだから。

夕矢 うらやましかったらまじめに働けばいいんだよ。

光一 働いてるよ。

夕矢 いい年してアルバイトのくせによく堂々と働いているなんて言えるな。

光一 俺もここに住みたいなあ。住んでもいい？

夕矢 断る！

光一 別に新婚さんってわけじゃないんだからいいだろ。ケチ！ じゃ、行ってくるわ。

夕矢 え？

藤実 迎えに行くの？

光一 うん。三十分くらいで戻ってくるよ。

夕矢 兄ちゃん。

光一 ん？

夕矢 必ず戻って来いよ？

光一 …え？

夕矢 ご飯作って、待ってるんだからな。

光一 …なに？

藤実 (少し慌てて) あ、もう人数分の材料買ってきちゃってるから。

光一 わかった。

藤実 玄関にささっている傘、適当に持って行っていいから。

光一 ありがとう。じゃ、行ってくるわ。

藤実 行ってらっしゃい。

光一、出て行く。

夕矢 ありえない。

藤実 にぎやかな人ね。

夕矢 もう少し落ち着けて。あれで三十だぞ。

藤実 見えないねえ。

夕矢 子供なんだよ、いつまでたっても。

藤実 でも、夢を追いかけているのっていいわね。

夕矢 なにが夢だよ。これ以上、親を心配させるなって。

夕矢、台所へ行く。夕矢のスマホがなる。

夕矢の声 だれ？

藤実 公衆電話。お父さんかな。

夕矢の声 悪い、出てくれる？

藤実 …はい。…ええ、藤実です。…今ついたんですか？ 長旅お疲れ様です。そうですね、

迎えに行きますね？ え、そうですか？ じゃあ、わからないようでしたらまた電話

してください。ええ。お待ちしています。(電話を切る)

夕矢の声 着いたって？

藤実 ええ。

夕矢の声 (出てくる) そんなもん、メールでいいだろうに。

藤実 いいじゃない。声を聞いたほうが安心できるし。それに、ケータイ持ってないんでし

よ。ほら。心臓の。なんだっけ。

夕矢 ああ、ペースメーカーね。あれ、ほんとに危ないの？

藤実 さあ。でも、お母さんが心配してるんですよ。電磁波とか。

夕矢 気にし過ぎだと思っただけだな。だって、

雷。

藤実 また降ってきた？

夕矢 (ベランダから外を見る) 暗くてよくわからない。

藤実 大丈夫かな。

夕矢 大丈夫だよ。…去年、週一でスキーに行っただか自慢してたぐらいだし。心臓以外は俺らより元気だよ。母さんだってついでにいるし。

藤実 それならいいけど…。

夕矢 …なに。

藤実 なんだか申し訳ないのよね。

夕矢 なにが。

藤実 今日のこと。騙してるみたいで。

夕矢 兄ちゃんのこと？

藤実 うん。

夕矢 しょうがないよ。会いたくないって言うんだから。

藤実 そうだけど…ちよつとね。

夕矢 これは父さんと母さんのためなんだよ。ついでに、兄ちゃんのためにもなるし。

藤実 そうだけど。…準備はできたの？

夕矢 まあね。あとは火を入れるだけ。

藤実 どれどれ。(台所へ行くこうとする)

インタホンがなる。

夕矢 はーい。

藤実 (緊張した感じで) 来た？

夕矢 ああ。(玄関へ)

葵 (声) こんにちは。

夕矢 (声) え？ あ、兄の…。あなたが。あ、そうですか。

藤実 (玄関のほうを覗き込む)

夕矢 (声) まあ、どうぞどうぞ。

葵 (声) おじやます。

夕矢と葵が居間に入る。

藤実 あら、こんにちは。

葵 こんにちは。すみません。あつかましくお邪魔してしまって。

夕矢 とんでもない。えーと。兄の…。

葵 はい。劇団で制作してます。

夕矢 制作…？

藤実 ほら。入場するときチケットをこう(身ぶり)切る人。

夕矢 ああ。そういう役割の方。

葵 ほんとはもっと色んなことしてるんですけど。

夕矢 あなたが。
 葵 田辺葵と申します。
 藤実 この前の演劇のときも、受付してましたよね。
 葵 あ、はい。
 夕矢 そうだっけ？
 藤実 そうよ。あの、あなたがそうなのね。
 葵 お忙しいところ見に来ていただいてありがとうございます。
 藤実 いいえ。
 葵 あ、差し入れのケーキもありがとうございました。
 藤実 全然いいんですよ、それは。
 葵 でも、あんなにたくさん。
 藤実 いいのいいの。
 葵 あれって全部夕矢さんの手作りですよね。
 夕矢 まあ一応本職だし。
 葵 パティシエでしたっけ。
 夕矢 まだ半人前だけどね。それに、あれ、全部試作品だから。
 葵 そうなんですか？
 藤実 なんだか、実験台にしてみましたごめんなさいね。
 葵 とんでもないです！ とってもおいしかったって。みんな。
 夕矢 そ、そう？
 葵 はい！ ひとりで七つも食べたつわものもいました。
 夕矢 聞いただけで胸焼けがする。
 葵 あ。
 藤実 このひと、甘いもの苦手なんです。
 葵 え、大変じゃないですか、味見とか。
 夕矢 味見は必要最低限で十分です。
 藤実 こういふ人なんです。
 葵 そうなんですネ。
 藤実 あ、座ってくださいね。いま、お茶をいれますね。
 葵 あ、お構いなく。

藤実、台所へ。葵と夕矢は座って世間話。

夕矢 そうですか。あなたが兄の（彼女）…。
 葵 ええ。（兄の劇団の者です）
 夕矢 いつも兄がご迷惑をおかけしてします。
 葵 い、いえ。こちらこそ。
 夕矢 あ、そうだ。兄に会いませんでした？ いま出て行ったばかりなんですけど。
 葵 いえ、会いませんでした。
 夕矢 入れ違いになってしまったかな。ちょうど今、迎えに行ったところなんですよ。
 葵 え？ 私を？
 夕矢 はい。ちよつとすみません。（電話をかける）…もしもし。夕矢だけど。いま来てるよ。彼女。うん。入れ違いになったみたい。うん。そう。戻ってきなよ。うん。じゃ。
 葵 あの、わたしを迎えに行っただけですか？
 夕矢 はい。
 葵 …？
 夕矢 …あの。

葵 はい。

夕矢 兄とは、…その…長いんですか？ …お付き合いですか？

葵 え？ …長い、と思います。彼がウチの劇団に来たときからですから。七、八年にはなると思いますけど。

夕矢 そんなに?! それはずいぶん長い…。

葵 腐れ縁ですね。

夕矢 いやいや。大したものですよ。

葵 それほどでもないと思いますけど。

夕矢 苦労されてるんじゃないですか。

葵 弟さんの前でこういうことを言うのはなんですけど…苦労しています。

夕矢 …やっぱり。

葵 いろいろありますけど。一番は女性関係ですね。

夕矢 ほんとうに兄がご迷惑おかけして申し訳ありません!

葵 もうウチの劇団の中だけでも四、五人とは付き合ってたんじゃないですかそれでやめちゃったコもいるし。今だつて…。

夕矢 今だつて？

葵 ええ。

夕矢 え…そんなことが許されるんですか？

葵 まあ、公演に迷惑さえかからなければいいんですけどね。

夕矢 あ、いや。というよりあなたはそれで平気なんですか。

葵 私ですか? 別に私は…。

夕矢 はあ。

葵 私はすっかり演じてくれれば別に。

夕矢 とても理解できない。やっぱり芸能の世界はなんと言うか…。変わった人間が集まる

ようになつてるんですね…。

葵 お兄さんが特別なんですよ。

夕矢 いや、あなたも相当変わっていますよ。

葵 …そうですか?

夕矢 なんとですか…とてもわれわれ一般人にはついていけない…!

葵 そんなことないと思いますけど…。ご覧になつたんですよね。どうでした、お兄さん

は?

夕矢 えーと…。あの…。

は?

藤実がお茶を入れて戻ってくる。

藤実 夕矢さんはお芝居が始まったらすぐ寝ちゃったんですよ。

夕矢 藤実さん!

葵 そうなんですか?

夕矢 すみません。徹夜続きで。劇場も薄暗かつたんで、つい。

葵 お忙しいんですね。

夕矢 わりと小さい店だから、休みもあつてないようなもんですよ。

藤実 何度も起こしたんですけどね。

夕矢 そんなことより兄はどうなんですか? どうにかかなりそうなんですか?

葵 どうにかという?

夕矢 簡単に言うと、役者として食っていけるのかと。

葵 力があります。こういう世界ですから絶対大丈夫とは言えませんが。

夕矢 あなたは、それでいいんですか?

葵 まあ、基本的には光一…さんが決めることですから。

夕矢 …なるほど。でも、ダメならダメで早く見切りをつけさせたほうがいいと思うんですよ。あなただって困るでしょう？

葵 え。わたしが!? えーと…。

夕矢 とにかく、これからも兄のことを末永くよろしくお願いします。

葵 はあ。(おおげさだなあ) こちらこそ。

会話が途切れる。雷が鳴る。

夕矢 近いかな。(ベランダのほうへ)

藤実 降ってきた?

夕矢 ちよつとな。

葵 (雷がちよつと怖い) 朝から降ったり止んだりしてますからね…。

藤実 いまのうちに買出しに行った方がいい?

夕矢 そうだね。

葵 あの…。

夕矢 なんてしよう。

葵 今日のホームパーティーなんですけど…私のほかに誰が来るんですか?

夕矢 えーと、君たちと僕たち。

葵 え、四人しかいないんですか!?

夕矢 うーん。本当は四人じゃないんだけどね。

葵 え?

夕矢 俺らの親が来るんですよ。兄には内緒にしてるけど。

葵 え!?

藤実 だから、全部で六人になります。

葵 ちょ、ちよつと待ってください。じゃあどうしてわたしが呼ばれたんですか?

夕矢 え、だって。

ドアが開く音。

光一の声 ただいまー!

光一、入ってくる。

光一 なんか飲み物ある?

夕矢 おまえなあ。

藤実は台所へ。

光一、葵の顔を見るなり、

光一 あれ? 葵さん。

葵 おつかれさま。

光一 どうしたの? 今日は。

葵 え? あなたが呼んだんでしょ。

光一 え。俺が?

葵 そう。今日、ホームパーティーがあるから来てねーって。家は、劇団の名に載ってるから調べてねーって。何度も送ってきたでしょ。

光一 あ。

葵 なに。

光一 (自分のケータイの送信履歴を確認する)

夕矢 おい、なんで劇団の名簿にウチの住所を載せてるんだ？

光一 そっちのほうで連絡つきやすいからだよ。あ！…

葵 なに？

光一 …いや、なんでもない。

葵 まさかとは思うけど…間違えた？

光一 …

葵 光一？

光一 間違えるわけじゃないじゃん！ だって、パーティーは、人数が多いほうがいいだろ？！

いやな沈黙。

夕矢 (ぼそり)…それでも役者か。

葵 帰ります。

光一 なんで？

葵 呼ばれてもないのに、ホームパーティーに参加するわけにはいかないから。

光一 せっかく来たのに。

葵 どうせ立花と間違えてメール出したんでしょ。田辺と立花じゃアイウエオ順で近いから。

光一 …いや、違うんだよ。朝、寝起きだったから。

葵 ほら。もう、信じられない。

光一 でも、いいじゃん。たくさんいたほうが楽しいし。ねえ！

葵 いやよ。どうして私が光一の両親と会わなきゃなんないのよ。

夕矢 あ。

光一 (ちよつとまじめに) え、なにそれ。

葵 なにが？

光一 両親って。

葵 来るんでしょ。夕矢さん、言ってたよ。

光一 …ねえ。

夕矢 なに？

光一 来るの？

夕矢 …来る。それより、間違えたってなに？

光一 なんにも間違えてないよ。

藤実が戻ってくる。

藤実 (飲み物を持って光一に出す) つまり、葵さんと光一さんは付き合っていないってことですね？

葵 え！？ そんなわけじゃないじゃないですか。

夕矢 そうだったんですか？ 俺はてっきり…。…なんか、すみません！いろいろ！

葵 いえ、大丈夫です。

光一 俺、帰る。

葵 は？

光一 葵さんはここにいろよ。(夕矢に) 葵さん一人暮らしでコンビニ弁当ばっか食べてるんだ。な。

葵 どうしてそうなるの？ あと、好きで食べてるんだからほっといて。
 夕矢 会ってやれよ。二人とも会いたい会いたいって言ってるんだから。
 光一 だめだよ。
 夕矢 どうして。
 光一 だって、俺、芝居やめたことになってるから。
 夕矢 は？
 光一 だから、二人とも、俺がちゃんと芝居やめて、ちゃんと就職して働いていると思ひ込んでるんだよ。
 夕矢 なんて？
 光一 たぶん、俺が、芝居やめて就職したって言ったからじゃないかと思うんだけど…。
 夕矢 要するに、嘘ついたってこと？
 光一 嘘じゃない。かるい冗談。
 夕矢 そんなの冗談じゃすまないだろ。どうしてそんな嘘つくんだよ！
 光一 しょうがないだろ。芝居は続けたかったし、親に心配もかけたくなかった。…まあ、そういうわけだから、いま、俺、親とは会えないんだ。…じゃ、
 夕矢 ちよつと待って。そんなウソ、いつまでもついてられないだろ。
 光一 俺が売れたらちゃんと言うよ。
 夕矢 いつだよ、それ。
 光一 …。
 藤実 正直に言ったほうがいいと思いますよ。
 葵 そうねえ。
 光一 正直に…そんなことしたら次の公演出れないよ！ 俺が前にいた劇団、それでやめちゃったんだから！
 葵 …なんで？
 光一 母ちゃん、客席から本番中の俺に説教してきたんだよ。信じられる？ 本番中だよ。私はあんたをそんな風に育てた覚えはない、こんなくだらな事してる暇が会ったら、就職活動しろって。
 葵 ホントに？ そんな話、聞いたことないよ。
 光一 そのときはアングラ系のお芝居だったから、お客さんは斬新な演出だと思ったみたい。でも、ウエルメイドな作風でおなじみのウチでそんなことがあったら…。
 葵 最悪払い戻しね。
 光一 あれ以来、母ちゃんとはまともに話していない。
 藤実 でも、今はお母さんが怒るようなお芝居じゃないんですよ。
 光一 でも、母ちゃん、芝居やめたって思い込んでるから。マジでどんな妨害工作しかけてくるか、わからないよ。
 藤実 そこまで心配することなの？
 夕矢 母さんなら危ないかもな。
 光一 でしょう！？ 母ちゃん、思い込みが激しいし、空気読めないから！
 夕矢 それで、就職したっていう話はいつしたんだ？
 光一 …三年位前かな。
 夕矢 三年も騙してるのか！
 光一 騙すつもりはなかったんだよ。でも、いまさらホントのことなんて言えないじゃん。
 葵 じゃあ、帰ろっか。
 光一 そうでしょう？
 夕矢 兄ちゃん。
 光一 じゃ、そういうことだから。
 夕矢 兄ちゃん！！ 待ってよ。

藤美 お父さんもお母さんとも何ヶ月も前からお兄さんに会うことを楽しみにしているんですよ。

光一 二人が会いたがってるのは定職についてきちんと働いている俺なの。…いいじゃん、夕矢となら何回も会ってるんだから。

藤美 この機会にきちんとお話をするべきじゃないんですか。

光一 だから公演の事もあるし…。

夕矢 いい機会だろ。

光一 なにが。

夕矢 このままズルズル役者なんかやってたってしょうがないんだし。

光一 (ちよつと怒る) 決め付けるなよ。俺の人生は俺が決めるんだよ。

葵 すみません！ 込み入った話はせめて次回公演の後でお願いします。もう来月本番な

光一 んで。そういうことだから。また、今度ね。

夕矢 ダメだよ。

光一 なんだよ。

夕矢 みんな、この日に合わせて準備してきたんだ。

光一 準備？

夕矢 兄ちゃん。今日が何の日かわかる？

光一 え？

夕矢 今日。…わかるわけないか。

光一 結婚記念日だろ。父さんと母さんの…。

夕矢 …他の日じゃダメだ。

光一 ダメなことないだろ。来年やればいいじゃん。来年。

夕矢 ダメだ。

光一 なんだよ。

夕矢 今年は結婚30周年だ。

光一 あ…。

夕矢 プレゼントだって用意した。

光一 プレゼント？

夕矢 指輪。

光一 …いいねえ。

葵 光一。

夕矢 プレゼントも用意した。ホームパーティーの準備もした。でも、いちばん大事なのは、家族揃ってお祝いすることじゃないのかよ。

光一 たしかに。

葵 なんて説得されてるの。嫌よ、本番中にあなたのお母さんが説教始めるのは。行こう！

光一 おもしろそう。

葵 光一！

夕矢 二人ともいい年なんだ。特に父さんなんて心臓やつちやつてるし、今回会えなかったら二度と会えないということだって…。

藤美 夕矢さん。

光一 (熟考) …。

夕矢 …親孝行したいときには親はなし。

藤美 夕矢さん、言い過ぎ。

葵 乗せられちゃダメ。最悪のケースを考えてよ。

光一 ちゃんと考えてるよ。

葵 じゃあ行くよ！

光一 俺んちさ。昔は貧乏で、俺もいたから、父ちゃんと母ちゃん、結婚式もできなかったんだよな。そんな二人に息子兄弟から結婚指輪かー。熱いなー。

夕矢 だろ！

葵 だからって。

光一 よし！

葵 光一！

光一 中間を取ろう！

夕矢 ……中間？

光一 父ちゃんと母ちゃんには会う。でも、芝居をやっていることは教えない。なんだ、簡単だ。

藤実 光一さん…。

葵 光一…。

光一 それでいこう！ きまり！

夕矢 いやだよ。そんなの騙してるみたいで気持ち悪いよ。

光一 だからウソも方便って言うじゃない。

藤実 でも、できれば全部打ち明けて、気持ちよくお芝居に打ち込むのがいいと思うけど。本番が近いならなおさら。

光一 そんなに簡単に納得してくれる人だったら始めからそうしてるよ！ どうしてもっと早く言ってくれないんだよ。

夕矢 言ったら兄ちゃん来ないだろ。

葵 そんな危ない橋は渡れないよ。

光一 だからあ、俺は一カ月後に迫った次の公演でみんなに迷惑をかけるわけにはいかないし、かといつてこんなメモリアルな日に、顔を見せないわけにもいかない。ほかにどうしろって言うの？

葵 ……。

光一 大丈夫大丈夫、黙ってりゃわからないって。

夕矢 どっから出てくるんだ、その自信は。

藤実 たとえば…お父さんだけに話してみるっていうのはどうかしら。

光一 父ちゃんに？

藤実 お母さんと違って公演を邪魔されることはないですよ。

光一 どうかな。父ちゃんも芝居嫌いだし。

夕矢 父さんなんか話したらすぐに母さんに伝わるよ。

葵 それは困ります！

藤実 少しでも歩み寄る準備をしておいたほうがいいと思うんです。

光一 でもなあ。父ちゃんを驚かすようなことはしたくないな。

夕矢 いつかはバレることだ。

光一 今はまずいでしょ。

葵 ……あんたが両親思いなのはよくわかったわ。

光一 よかった。

葵 それなら、私もここに残る！

光一 ……え？

夕矢 ……なんで？

葵 あなたひとりじゃ心配すぎる。気のせいかな、あなたから全く緊張感が伝わってこないのは。

光一 大丈夫だよ。俺は役者だよ。どんなに難しいシチュエーションでも完璧に演じきって見せるさ。

葵 光一、気づいて。あなたの演技はキャパ○○人以上の劇場じゃないと大げさすぎて見

てられないんだよ！

光一 できるって。

藤実 あの…いいかしら。葵さんは、お父さんとお母さんにはどう自己紹介するつもりなの？

葵 それは…光一の彼女ということにします。

光一 え、俺の？

葵 だって、そういう体で亜希子呼ぼうとしてたんでしょ。

光一 なんぞ照れるなあ。

葵 あなた、わかっているの？ わたしたちの公演のピンチなのよ。あなたがここでハマしたら、私たちの公演がめちゃくちゃにされんのよ。わかっている？

光一 まだそうと決まったわけじゃ…。

夕矢 あと、人の親をそこまで不審者扱いしないでね。

葵 わたしは制作です。トラブルの芽は徹底的に摘んでおきたいんです。

光一 なんぞか怖いなあ。葵さん。

葵 あなたが頼りないからでしょう！

光一 大丈夫だって。

夕矢 言っておくけど、俺に頼るなよ。

葵 え。

光一 なんておまえに頼らなきゃいけないんだよ。

夕矢 俺には兄ちゃんを助ける義理ないからな。ばれたらばれたで別に。

葵 そんな！

夕矢 俺は兄ちゃんには一刻も早く普通に働いてほしいんだよ。長男のクセにいつまでも遊んでばかりいないで。

光一 なんてそういちいち働かせたがるんだよ！

夕矢 それは…。

玄関チャイムが鳴る。

藤実が出る。

藤実 はーい。(玄関へ)…まあ、お久しぶりです。

光一 来た？！

藤実の声 長旅ご苦労さまでした。えーと…失礼ですが。ああ、そうですか。どうぞ、こちらです。

葵 私は光一の「彼女」ですから。二人とも話あわせてくださいね。

光一 わかっているよ。

片桐潤一郎が入ってくる。そのあとに、立花亜希子、最後に藤実。

光一 父ちゃん。

潤一郎 おう。久しぶりだな。

光一 お、おう。

潤一郎 聞いたぞ。おまえの彼女なんだってな。

光一 え？

葵 え？

亜希子 来ちゃった。

夕矢 ま、まあ、座ってよ。

葵 (小声) なんて？ 亜希子には連絡いってないんじゃないかなかったの？

光一 あ、ごめん。そういやさつき電話してた。
 葵 ええー!?(潤一郎たちと距離をとる)
 藤実 こんにちは。お父さん。
 潤一郎 ああ。藤実さん。久しぶりだね。
 藤実 天気はどうでしたか?
 潤一郎 だいぶ降って来たかな。
 藤実 最近、ずっと天気がよくないんですよ。
 光一 なんて父さんが亜希子と一緒に来てるんだよ。
 潤一郎 地下鉄出たところで雨宿りしてたんだ。話しかけてみたら四階の片桐さんの所へ行
 くっていうじゃないか。
 亜希子 それなら傘に入りませんかかって言ってくれて。
 光一 そうなんだ。
 夕矢 :なんでそんな気軽に知らない女に話しかけてるんだ。
 亜希子 あれ、葵さんも呼ばれてたんですか?
 葵 一応ね。それより、こちらのお父さんとはどういう話をしたの?
 亜希子 何も話してないですよ。コウイチと付き合ってることは言っただけ。
 光一 いや、てるね。
 葵 それだけ!?
 亜希子 :それだけですけど。
 葵 ならいいわ。ぎりぎりだけど。
 潤一郎 ああ、疲れた。やっぱり都会だと歩くだけで疲れるな。
 夕矢 大した都会じゃないよ。
 潤一郎 地下鉄があれば立派な都会だよ。
 藤実 あの:。お母さんは?
 潤一郎 え?
 藤実 お母さんは。
 潤一郎 (急に不機嫌になって) 知らん。
 藤実 え。
 潤一郎 知らない!
 夕矢 どうしたの?
 光一 一緒に来たんじゃないの?
 潤一郎 途中までな。
 光一 どういうこと?
 潤一郎 :歩いてきてる。
 光一 え、元から地下鉄じゃないの?
 潤一郎 俺が地下鉄に乗るっていったら、あんな暗くて怖いものに乗らたくないって言い出
 すから:。
 光一 ええ?
 潤一郎 そんなに嫌なら歩いていけ!:::って言ったら:本当に歩いて行っちゃった。
 夕矢 またケンカかよ? いい年してなにやってるんだよ。
 潤一郎 :。
 藤実 このマンションわかるかしら。
 潤一郎 子供じゃないんだ。何度か来てるんだし、わかるだろ。
 光一 大丈夫かな。
 藤実 まあ、歩いても15分くらいだと思っただけ。
 夕矢 天気も悪いしな。
 藤実 そうねえ。

光一 俺、迎えに行ってくるわ。
 夕矢 いや！ 兄ちゃんはここに残るべきだ。俺が行ってくる。
 藤実 私が行こうか？
 夕矢 ……いいかい？
 藤実 買出しあるし。ついでに。
 潤一郎 すまないね。
 藤実 じゃ、行つてきますね。

藤実、出て行く。

潤一郎 いやあ、光一も元気そうでよかったよ。…
 光一 父さんこそ。

潤一郎 まさか、オマエが探偵事務所に勤めてるなんてなあ。

夕矢・葵 え！？

亜希子 (別な意味で)…ええ！？

潤一郎 初任給25万だろ。危ないことはないのか？

光一 えー、うん。でも、まったく危険のない仕事って少ないじゃない？ ほら、牛井屋の

店員だつて襲われる時代だよ。

潤一郎 まあ、そんなもんか。探偵ってどんな仕事してるんだ？

光一 えーと。…この前は密室殺人をひとつ解決したんだ。

夕矢・葵 (おいおい！)

潤一郎 へー、すごいな。すまん、ちょっと冷えちまった。トイレ貸してくれ。どっちだっ

夕矢 そこ出て右。

潤一郎、居間を出る。

葵 ちよつとどういうこと？！

光一 え？

夕矢 なんて探偵事務所なんだよ！

葵 それに密室殺人って！

光一 なに怒ってるの？

葵 あなたの探偵観、かなり古いと思うわ。

夕矢 古いとか単純にウソ臭い。

亜希子 コウイチ、居酒屋のバイトやめたの？

葵 あんたはちよつと黙ってて。

亜希子 ……

光一 だつてほかに思い浮かばなかったんだからしょうがないだろ。

葵 ……残って正解だった。

光一 よく覚えてたな、父さん。俺も忘れてたのに。

夕矢 そりゃ、不良息子の初めての就職先だもの。覚えてるに決まってるだろ。

光一 不良！？

夕矢 不良だろが。

光一 たしかに。

亜希子 コウイチ、どういうこと？ 探偵ってなに？

葵 あとで教えてあげるから今は黙ってて。

亜希子 ……

夕矢 で、どうするんだよ。打ち明けてみる？

光一 それはムリだよ。

葵 そうね。

夕矢 こんな調子でいつまでも騙し続けられるとは思えないけどな。

葵 それはそうかも…。

亜希子 ねえ、騙すってなに？ 誰を？

葵 立花。しっ。(静かにしてて)

亜希子 …。(面白くない)

夕矢 兄ちゃんから言いにくいんだったら、俺のほうから言っつてやろうか？

光一 それは…。

夕矢 (台所へ) あんまり隠そうとしないほうがいいと思うけどな。

夕矢、台所へ。

潤一郎、戻ってくる。

潤一郎 よいしょっと。(座る) なあなあ。探偵つてやつぱり銃とか持ってるのか？

光一 うん、持ってる持ってる。

葵 (たたく) そんなわけないでしょう…！

光一 007じゃあるまいし、そんなわけないじゃん。

葵 ジョークジョーク。ジョークですから！

潤一郎 (葵を見つめる)

葵 ……なんでしようか？

淳一郎 ……ところで、あなたは？

葵 私は光一君のかの…。(亜希子を見る)

亜希子 ……？

潤一郎 田辺です。田辺葵です。

潤一郎 うん。光一達とはどういう関係？

沈黙。

潤一郎 どうした？

亜希子 この人は制作をやっているんですよ。

葵 立花！

潤一郎 製作？ なにを作ってるんだ？

亜希子 そうじゃなくて。芝居の。

葵 ちよっと、待って！！

潤一郎 芝居？ おい。光一…。

光一 なに？

潤一郎 おまえ…、まさかまだ続けてるのか？

葵 ……え。

潤一郎 もう二度と芝居なんてものには関わらないといったのは…ウソか？

光一 ウソじゃないよ。

潤一郎 じゃあ芝居の人間がなんでここにいるんだよ！！

葵 わたし、芝居になんて関わったことないです！

潤一郎 今亜希子ちゃんが芝居って言ったぞ！ ねえ！！

亜希子 (剣幕にたじろぐ) え…

潤一郎 光一！

光一 (平然と) 聴き間違えたんだよ。

潤一郎 なに!?

光一 亜希子は柴の製作って言ったんだよ。

潤一郎 は?

光一 だから、柴の製作。

潤一郎 柴の製作?

光一 だから、父さんにも分かりやすく言うと…植木屋? そうだ、植木屋だ!

葵 (あぜん) …。

光一 ね。…そうだよね!

葵 (機械的に) はい、実はわたし、植木屋なんです。

潤一郎 あなたが? そんな風には見えないけど。

葵 (機械的に) それでも芝を刈るのが私の仕事なんです。

潤一郎 芝刈りか。桃太郎に出てくる爺さんみたいだな。(二人で笑う)

葵 …。(納得いかない)

潤一郎 …それで、なんで、植木屋がここにいるの?

葵 …。呼ばれました。

潤一郎 どうして?

葵 仕事…。

潤一郎 マンションの四階で?

葵 …が忙しくて、お疲れみたいだねって、片桐さんのほうから招待いただいたんですよ。

光一 話は最後まで聞いてくれよ、父ちゃん。

潤一郎 ああ、そうかそうか。

亜希子 葵さんって、植木屋さんだったんですか!?

葵 お願いだから静かにしててくれる?!

潤一郎 あれ。でも、ずいぶん光一とは親しそうにして…。

亜希子 だから、同じ(劇団で…)

葵 立花!

亜希子 は、はい。

葵 あんたもう帰って!

亜希子 ええ!?

光一 葵さん…。

亜希子 (光一に) わたしなにか悪いことした?

光一 間が悪い…。

亜希子 え? 意味がわからないんだけど。

夕矢が顔を出して。

夕矢 もうすこし、静かに話してもらえませんか。隣近所…。

葵 うるさい!

夕矢 (びっくりして引っ込む)

葵 いいから帰って!

亜希子 嫌です! どうして葵さんにそんなこと言われなきゃならないんですか!?

葵 …。あなたには光一はもつたないのよ!

亜希子 ええ!?

夕矢 (はらはら見守る)

葵 出て行って!

亜希子 嫌です！

葵 わからない子ね。あんたなんか遊びなのよ。

亜希子 (気にしていることを！) そ、そんなことないです！ 今日だってコウイチに呼ばれてましたし…。

葵 直前になつて？

亜希子 何度もメールしたつて言ってます。ね。

光一 う、うん。

葵 でも、届いてなかったんでしょ？

亜希子 …。光一…。

潤一郎 光一！！

光一 今度はなに？

潤一郎 おまえ、どっちつかずはよくないぞ。

光一 …え？

潤一郎 大分わかってきたぞ。同じ…同じ男を取り合つてたんだな、おふたりさん。だが、光一の本命は植木屋の葵さんだ。

亜希子 (シヨック) そんな…！

葵 (シヨック) 植木屋…！？

潤一郎 そして、亜希子さん。あなたは残念だが二番手だ。今日のホームパーティー。まず最初にオマエは葵さんを誘った。しかし、仕事があるからと断られた。それで直前になつて亜希子さん、あなたを誘った。ところが、植木屋の仕事は雨で中止。本当の直前になつて葵さんはここへやつてくれた！

光一 父さん。

潤一郎 どうだ。父さんの推理もなかなかのものだろう。

光一 …すごいよ、父ちゃん！

夕矢 …別の意味でな。

潤一郎 ただな。光一。どっちつかずはよくないぞ。お前の口から、一番愛しているのは葵さんか、亜希子さんか、はつきり言つてやるべきなんじゃないのか？

光一 え！？ (二人の顔を交互に見る)

葵 (さすがに気まずい) お父さん、そこまでしなくても…。

潤一郎 いや。こういうことはキツチリしておかないと。あとあと響くから。

亜希子 (泣きそう) そうだったんだ…。

葵 あ、あのやつぱり私、ただのお隣さんなんです。だから別に光一とはなんでもありません。ただのお隣さん。

潤一郎 「ただの」お隣さんが、光一のことを光一なんて呼び捨てにするわけないだろう。

葵 …。(しどろもどろ) あ、あの…困り…ます。わたし、隣に住んでるんですけど、私には私で…恋人がいますし！ 本命だなんて言われても…かえつて困るかなーなんて。

潤一郎 なに！？

光一 葵さん、大丈夫…？

葵 だつて…、そうじゃないですか。お父さんの推理は見事なんですけど、ひとつ間違つてるじゃないですか。わたし、一歩引いてたじゃないですか…。先に立花がカノジョだつて言つたとき、わたし引いてたじゃないですか。わたし、そんなにはつきり本命つて言われても…迷惑なんですけど…！

亜希子 さ、最低…。

葵 そう、最低なの。わたしは。

潤一郎 なるほど…。光一、おまえはどうなんだ。

光一 …どうしよう！

亜希子 もういい。帰る。
光一 ちよつと待つて。
亜希子 さよなら！ もう！

亜希子、出て行く。

光一 あらら。
葵 あ、立花！

潤一郎 若いんだから、女遊びをするなどは言わない。でも、あんまり相手を怒らせちゃいけないな。

夕矢 (コートをはおりつつ出てくる) 自分だって母さんとケンカしてるくせに。

光一 どっか行くの？

夕矢 このままにしておけないよね。事情を説明してくるよ。

光一 いいよ。あとで説明しとくから。

夕矢 あとで？ いいの、あんなに怒らせといて。

光一 しょうがないだろ。

夕矢 そこまでして隠さなきゃいけないことかな。

葵 すみません。

潤一郎 なんでオマエがしゃばるんだ。

夕矢

∴。

夕矢、出て行く。

光一、葵、潤一郎が残る。

潤一郎 なんだ、あいつ。

光一 さあ。

潤一郎 結局、どうするんだ。おまえたち。ゆくゆくは結婚って感じでもないみたいだな。

葵 あ、いや。私は、∴その場その場で楽しめればいいかなって。

潤一郎 ふうん∴。おい。

光一 ん？

潤一郎 タバコ買ってきてくれ。(空箱を渡す) これと同じやつ。

光一 え、今？

潤一郎 今だ。

光一 自販機ある？

潤一郎 向かいの売店にあった。

光一 よく見てるな。いいのかよ。心臓に機械入れてるくせに。

潤一郎 いいんだよ。たのむよ。じじいに一階まで歩かせる気か？

光一 別にいいけどさ。

光一、出て行く。

潤一郎 植木屋を始めてどれくらいになるんですか。

葵 え？ ∴一ヶ月くらい？

潤一郎 そうだろうね。日に焼けてないし。体も弱そうだし。疲れるだろ？

葵 まあ∴。

潤一郎 肩でも、もみましようか。

葵 い、いえ。結構です。

潤一郎 遠慮しないで。こう見えても学生時代に、スキーで国体まで行ったんですよ。マジサージは、得意なんですよ。

葵 本当に、結構です！

淳一郎 (ハンドバックからスマホを取り出して) じゃあ、メールアドレス教えてもらえます？

葵 わたしのですか？

潤一郎 僕も、もうオジイサンだからさ。いろんな人とコミュニケーションをとりたいんだよね。心臓にも機械埋まつてるし、明日どうなるかわからない身なんですよ。

葵 心臓に機械つて。

潤一郎 ペースメーカーです。あ。大丈夫です。携帯電話やスマートフォンは22センチ以上離して使えば大丈夫なんですよ。ネットで調べました。

葵 ネット…。っていうか、だいぶ古い記事じゃないですか。それ。

潤一郎 とにかく、アドレスを。あ、ラインのほうがいい？

葵 いや、あの…。

雷が鳴る。

葵 (悲鳴。思わず潤一郎の体にしがみついてしまう。すぐに離す) あ、すみません。

潤一郎 雷、苦手なんですか？

葵 そ、そんなことはないです。

潤一郎 植木屋さんが自然現象を怖がってちゃいけませんね。

葵 ま、まあ…。奥さんはご存知なんですか？ その、スマートフォンのこと？

潤一郎 夫婦の間には、多少の秘密だつて必要ですよ。

葵 た、多少の…？

潤一郎 わたしはね、あなたみたいなさばさばした感じの子が好みなんですよ。

葵 はあ…。

ドアの開く音。潤一郎、あわててケータイをバックに隠す。

光一が入ってくる。

光一 ただいま。

潤一郎 早いな。

光一 あ、いや。今、お金なくて。葵さん、500円くらい貸してくれない？

葵 え？

潤一郎 オマエ、500円もないのか？

光一 え？

葵 あ、そ、それはですね…。

光一 (平然と) 普段カードしか使わないから。

潤一郎 そうなのか。

葵 …。ちよつと待って。

潤一郎 …。ちよつと失礼。

光一 また？

潤一郎 (ちよつとむつとして) 今度は大きいほうだよ。

潤一郎、トイレへ。

葵 心臓に悪い…。

光一 いやあすごいよ。「あんたなんて遊びなのよ！」葵さん、まだまだ役者でいけるんじゃない？

葵 あのさ、どうしてあんた、そんなに危機感ないわけ？

光一 あせつてもしょうがないだろ。
葵 ……それに納得いかない。

葵 私は、ちゃんと仕事やってるのよ。契約社員だけど、この不況下にボーナスだってもらってるし。それなのに、なんで飲み屋でバイトしているあなたが探偵で私が隣の植木屋さんになっちゃうわけ？

光一 うまくごまかせたんだからいいだろ。

葵 でも、わたし、あのお父さんの前でずっと植木屋やんなきゃいけないんでしょ？そんなの耐えられない。詳しく聞かれたらおしまいよ。

光一 大丈夫だよ。父さんたちだって植木の知識はないから。

葵 そういう問題じゃない。

光一 しょうがないじゃん、そういう流れだったんだから。

葵 探偵事務所までは許せるの、ぎりぎり。でも、密室殺人とか拳銃を持つてるとか、どうしてリアルにそんなウソがつけるの！

光一 葵さん…。

葵 なによ。

光一 だんだん楽しくなってきたよね？

葵 楽しまない！

光一 あれ？怒ってる？

葵 気づくのが遅い！

光一 怒っている葵さんも、かわいいね。

葵 やめて。わたし、年下にかわいいって言われるの一番ムカつくのよ。

光一 俺、葵さんのせいで亜希子にもふられそうなんだけど。

葵 それは悪かったと思ってるけど。

光一 そうだよ。葵さんだって結構ひどいこと言ってたよ。

葵 あとであやまつとく。でもね。わたしは次の公演を無事に乗り切るためだったらなんだってやるからね。

玄関のドアが開く。

夕矢 (声) ただいま。

光一 でも、どうなの？ ホント役者でいけるよ。

葵 やめてよ。もうあきらめたんだから。

夕矢、戻ってくる。

夕矢 だいぶ降ってきた。

葵 どうだった？ 彼女。

夕矢 わからない。足が速すぎて追いつけなかった。

光一 役立たず。

夕矢 兄ちゃん…。(誰のせいで…)

光一 なに？

夕矢 (あきれて) なんでもない。…父さんは。

光一 トイレ。

夕矢 あ、そう。
 葵 (小声) あのね、夕矢さん。今、お父さんの中でこの人が探偵で、私が隣に住んでい
 る植木屋ってことになってるから、話あわせてくださいね。
 夕矢 まだやってたんだ？
 光一 なんだよ、その言い方は。必死なんだよ、こっちは。
 葵 あんたは言うほど必死じゃないけどね…。
 夕矢 なんて植木屋なの？
 葵 それはこの人が…。

潤一郎、戻ってくる。三人は気づかない。

夕矢 せっかく会わせたのに、かえって心の距離が広がったみたいだ。
 光一 うまいこと言うなよ。
 夕矢 早く本当のこと言った方がいいって。
 葵 言えないからこうしているいろいろ考えてるんです。
 潤一郎 本当のことってなんのことだ？
 夕矢 父さん。
 光一 なんでもないって。
 葵 聞き違いじゃないんですか？
 潤一郎 いや、確かに言った。
 夕矢 あのね、父さん。落ちて聞いてほしいんだ。
 潤一郎 なんだ。
 夕矢 兄ちゃんのことなんだけど。
 葵 夕矢さん！
 潤一郎 光一がどうかしたのか。
 夕矢 実は、父さんに隠していることがあるんだ。
 葵 ないです！ そんなの、ないです！
 潤一郎 (まじめに) なんだ。言ってみろ。
 夕矢 兄ちゃん、言うからな。
 光一 …。
 夕矢 兄ちゃんは、実は…。
 光一 夕矢、あのことバラすぞ。
 夕矢 …？
 潤一郎 なんだ、早く言えよ。どっちでもいいから。
 夕矢 …。
 光一 藤実ちゃん、遅いな！ 夕矢！
 夕矢 う…！ 父さん、実は兄ちゃん…。
 潤一郎 早く言いなさい。光一の隠し事ってなんだ？
 夕矢 …実は兄ちゃん、母さんに内緒でプレゼントを用意したんだ！
 潤一郎 …なんだって。おまえ(光一)が？
 葵 え…。
 夕矢 (がっかり)…。今日が何の日かわかっている？
 潤一郎 …俺たちの結婚記念日か。
 夕矢 そう。本当はホームパーティーが盛り上がってからプレゼントしようと思っていたん
 だけど、二人がケンカしてるから予定を変更した。
 潤一郎 …。
 夕矢 そうだろ、兄ちゃん。

光一 ……ああ！
 夕矢 ちよつと、待ってて！

夕矢、下手の寝室へ。指輪の入った入れ物を手に戻ってくる。

夕矢 はい。(渡す)

潤一郎 おお。これを…、お前(光一)が…。

光一 ……ああ。

夕矢 ……。

潤一郎 そうか…。しかし、どうして今これを…？

夕矢 ……やっぱり、俺たちが渡すんじゃないかって、父さんの手から渡すほうがいいと思ったんだ。こうなったらね！

潤一郎 そうか。なるほどな。

光一 (平然と) これで、母さんと仲直りしなよ。

潤一郎 ……。

光一 あれ、うれしくない？

潤一郎 ……俺は立派に成長した光一の顔、見ただけでも十分だけどな…。

光一 あら…。

潤一郎 ちよつと、母さん探してくるわ。

光一 大丈夫？

潤一郎 ああ。見つかんなくても小一時間位したら、戻ってくるから。

光一 父さんが行かなくても、俺、探してくるよ。

潤一郎 ばか。…自分で探したいんだよ。

夕矢 傘は？

潤一郎 ある。じゃ、ちよつと行ってくるわ。

光一 行つてらっしゃい。

潤一郎、出て行く。

葵 ……なにこれ。

光一 (拍手) ナイス！ さすが俺の弟。

夕矢 ……お前は鬼だ！

葵 なに、これ。

光一 見てのとおりじゃない。

葵 どうして？

光一 夕矢も人の子だつてことだよ。

夕矢 ……。

葵 なに。

光一 夕矢には、藤実ちゃんに知られたくない秘密がある。

葵 え、なんなの。

夕矢 兄ちゃん。

光一 夕矢が藤実ちゃんと知り合つたのは、合コンなんだ。

葵 意外…。

光一 そうなんだよ。

葵 そうなの？

夕矢 俺は人数あわせて無理やり連れて行かれたんだ。

光一 無理やりでなんで藤実ちゃんお持ち帰りしてるんだよ。

夕矢　：それは言わないでよ。
 葵　たしかに説得力はない。
 夕矢　俺はつまみ食いばかりしてる兄ちゃんとは違う。真剣に付き合っただけで結婚したんだ。

問題あるか。

光一　ふっ。言えば言うほどボロが出るな。夕矢。

夕矢　：なにが。

光一　あの時、夕矢が一番好きだったのは藤実ちゃんじゃなくて、その隣にいた葉子ちゃんだ！

葵　そうなの？

光一　こいつは今でもたまたまに葉子ちゃんとメールのやり取りしている。

葵　それは良くないんじゃない？

夕矢　いいだろ、メールくらい。

光一　葉子ちゃんが店に来たとき、こいつこっそりかわいいクッキー缶、プレゼントしてたんだって。クッキーじゃないよ。クッキー缶だよ。露骨すぎんだろ。職人がどうとか言ってるやつのことかかって。

ぐう…。

夕矢　葵　ずいぶん詳しいのね。

光一　その合コンをセッティングしたのは俺だから。

葵　ああ、あんたもいたんだ

光一　それに、もともと葉子ちゃんとは合コン仲間だ。

夕矢　それさえ知っていれば、サービスなんかしなかったのに！

葵　要するにあんたは夕矢さんの弱みを握ってたってことね。

光一　そういうこと。

葵　助かったけど、あんた最低ね。

光一　お互い様。

葵　たしかに。ばらされたくなかったら協力してね。夕矢さん。

夕矢　：俺はな。俺たち夫婦で買ったあの指輪を、兄ちゃんも入れて三人からのプレゼントっていうことにするつもりだったんだよ。それなのに、どうして一円も出してない兄ちゃんひとりからのプレゼントになっちゃうんだよ。

光一　日頃の行いってやつさ。

夕矢　兄ちゃんだけには言われたくないよ！

光一　まあ、そういうわけでよろしく。確認しとくけど、俺は私立探偵。で、両親に指輪を

プレゼントしている。葵さんは…なんだっけ。

葵　お隣さんで植木屋。あんたが最初に言ったんだけど。

光一　そうだっけ？　夕矢、ちゃんと覚えた？

夕矢　今日のことは一生忘れない。

光一　よし。

夕矢　なんでこんな目に…。

玄関チャイムが三度鳴る。

光一　あの鳴らし方は。

葵　え。

光一　母さんだ。

夕矢　もう一度確認させてくれ。兄ちゃんが私立探偵で、あなたが植木屋。

葵　お隣さんのね。

光一　おいおい大丈夫か。

夕矢 俺は職人だ。請け負ったからには、必ずやる。

光一 あ、待って。

夕矢 なに？

光一 (葵に) 結局俺たち、付き合ってるの？

葵 え。：付き合ってるけど、遊び。

光一 わかった！

夕矢 わかっているとと思うけど、それ母さんに言っちゃダメだからな。

葵 はい！

夕矢、玄関へ出迎えに行く。

夕矢 (声) 濡れなかった？

ゆかり (声) だいじょうぶ。

夕矢 (戻ってきて) 来たよ。

夕矢、ゆかりから手土産を受け取って、そのまま台所へ。
あとから、ゆかり、スーツ姿の赤石良太が入ってくる。

光一 母ちゃん。

ゆかり 光一！ ひさしぶり。

光一 ひさしぶり。：。

ゆかり 元気だった？

光一 もちろん。

夕矢 (台所から戻ってきて) 心配したよ。

良太 こんばんは。

夕矢 赤石さんじゃないですか。どうしたんですか。

ゆかり この人に道教えてもらったのよ。

夕矢 もう何回目だよ、ここ来るの。

ゆかり しょうがないじゃない。毎日来てれば覚えられるんだけど。

夕矢 すみません。

良太 いいえ。

葵 こちらの方は？

夕矢 お隣さんです。

良太 赤石です。どうも。

夕矢 お隣さん？ (気づいて葵を見る)

葵 …… (またか！)

ゆかり それでね。お礼ってほどのものじゃないけど今日のホームパーティー？ ……招待しようと思うんだけど、いいでしょ？

光一 もちろん。

夕矢 で、でも、赤石さんの都合も聞かなきゃ。ね！

ゆかり 大丈夫よね？ ちよっとくらいなら。

夕矢 赤石さんは忙しいんですよ。

ゆかり そうなの。

良太 実は明日、非番なんです。

夕矢 非番だと！？

ゆかり 非番って？

良太 あ、ぼく仕事、警察官なんですよ。

ゆかり そうなんだ。すごいわね。

良太 でも、いいんですか？ 親子水入らずのところを。

夕矢 困ります。

良太 え…？

ゆかり 夕矢。

夕矢 だって、今日は親子水入らずって話だったろ！

ゆかり いいじゃない！ そんな細かいこと。

良太 あの…なにか複雑なご事情があるようなので、私は…。

ゆかり なに遠慮してるの。いなさいよ。

良太 でも…。

ゆかり いなさいよ。

良太 …。

夕矢 兄ちゃん…。

光一 いいんじゃない、それくらい？

夕矢 どうしてみんなこういい加減なんだ…。

ゆかり いいじゃない、それくらい。ねえ。

光一 そうだよ。ねえ。

夕矢 …ごゆっくり！

ゆかり よかった。家主のお許しが出たわ。ゆっくりして行ってね。

良太 実は、誘ってもらってうれしんです。最近、弟に彼女ができたんで一人で食事す

るのが寂しかったんですよ…。

ゆかり ちようどよかった。じゃあ決まりね。

良太 よろしくお願ひします。

光一 よかったね。

良太 あ、あの…。いったん着替えてきてもいいですか。仕事帰りなもので。

夕矢 もちろん。

良太 あの…。

夕矢 なんですか？

良太 ホームパーティーということなんですけど、服装とかはきちんとしていたほうがいい

夕矢 なんですか？

良太 なんでもいいですよ。

光一 わかりました。実は、光一さんとお話できるの、すごく楽しみです。では、またの

ちほど。

光一 はーい。

良太、出て行く。

夕矢 あれ。兄ちゃん、赤石さん知ってるの？

光一 うん、いっつもうちの公演、見に来てもらってるから。

夕矢 え…。(嫌な予感)

光一 なに？

夕矢 なんでもない。(スマホを取り出す)

ゆかり 夕矢。

夕矢 わかってるよ。父さん来たら、ちゃんと電源切るから。(電話かける)…あ、藤実

さん？ 母さんついたから、買い出しすんだら戻ってきて…

夕矢、言いながら台所へ。

ゆかり ああ、疲れた。

光一 おつかれさま。

ゆかり 藤美さんは？

光一 天気が天気だし、母さん探しに出て行ったよ。

ゆかり あそう。都会って歩くだけで疲れるのよね。

光一 ははは。父さんと同じこと言ってる。

ゆかり ほんと酷いのよ。なにが楽しいんだか知らないけど、地下鉄に乗るぞ乗るぞって。結局よく知らないところまでほったらかしにされて、雨は降ってくるし、もうくたくた。

光一 それは父ちゃん悪いわ。

ゆかり 無理やり地下鉄に乗せようとするんだもの。乗りたくないっていつてるのに。

光一 そっかー。大変だったんだね。

葵 ……（こっそり壁つたいに部屋を出ようとする）

ゆかり ……ところであなたは？

葵 え！？

ゆかり 光一の彼女…？

葵 あ、いえ。違います！

ゆかり じゃあ、どなた。

葵 （ひらめいて）お、お隣さんです。田辺といいます。

ゆかり お隣さん？ じゃあさっきの方と一緒に住んでるの…？

葵 （即座に）違うほうですよ。

ゆかり 違うほう？ ……え？

葵 どうかされました？

ゆかり この部屋、角部屋だからお隣さんは一つしかないでしょ？

葵 ……あ。

ゆかり 違うほう…。

葵 （きつぱり）一緒に住んでいるんです！

光一 ええっ。

ゆかり ああ、そういうこと。

葵 ええ。

光一 え、どういうこと？ 俺、よくわからなかったんだけど。

ゆかり え、だから…「違うほう」なんて言うからおかしくなるのよ。「もう一人のほう」

って言わないと。

光一 ……？

ゆかり さっきのお隣の人、赤石さん？ ……の弟さんの彼女ね。

葵 え？

ゆかり そんな言い方するからもう一部屋どこかにあるのかと思っちゃったわ。

葵 ……すみません。紛らわしい言い方して。

ゆかり あ。なんだ。それじゃあ最初からお隣さんも呼んでたんじゃやない！

夕矢、お茶を入れて出てくる。

夕矢 うん。人数が多いほうが楽しいと思って。ご近所づきあいも大事だし。

ゆかり あなた、大丈夫？ さっきと言ってること全然違うけど。

光一 ……ん。どういうこと？

夕矢 （光一に）お隣の赤石さんは兄弟で住んでいるんだ。さっき来たお兄さんの弟さん

には新しい彼女ができて、その彼女が葵さん、あなたなんだよね。

ゆかり そういうことよ。

光一 なるほど！

葵 ……。

ゆかり 大丈夫？ 顔色が悪いみたいけど。

葵 え、いえ。大丈夫です。

ゆかり 最近夜になると冷えるのよね。夏なのに。こつちもそうなの？

葵 ああ、本当に大丈夫ですから。

ゆかり そう？ ……今日は弟さんも来るの？

葵 来ないと思います。仕事が忙しいそうです。

ゆかり あれ、弟さんは学生だって言ってたけど。

葵 ……。バイトが…。

ゆかり ああ。大学生も大変ね。

葵 そうなんですよ。

ちよつと会話が途切れる。

光一 父さん、遅いね。

ゆかり (深刻に) 光一…。

光一 なに。

ゆかり ちよつと聞いておきことがあるんだけど。

光一 うん。

ゆかり まだ続けているの？

光一 (ちよつと慌てる) え、なにを？

ゆかり ……。

光一 な、なに。

ゆかり 以外の一…。

ゆかり (全員の前のめりの視線を感じて) なに？

夕矢 なんでもない。

ゆかり 悪いんだけど、あんたと二人っきりで話したいんだけど。

光一 え？ なにさ。

ゆかり 他の人には聞かれたくない。

光一 ……今すぐ？

ゆかり うん。むしろ今のうちに。みんな、ちよつと席をはずしてくれない？

夕矢 それより二人が移動したほうが早いんじゃない？

ゆかり そうね…。どこかある？

夕矢 寝室でよければ空いてるけど。

ゆかり じゃあ、それで。

夕矢 うん。

ゆかり ちよつと来なさい。

光一 な、なんだよ。

二人、寝室に移動する。

夕矢 万事休すだ。

葵 なんだ。

夕矢 決まってるだろ。もう、ばれちゃってるんだよ。

葵 まさか。
 夕矢 あんな小学生レベルの嘘で母さんまで騙せるわけがない。探偵だの、密室殺人だの。
 葵 たしかに…。
 夕矢 女の勘は鋭いんだ。

ドアに耳をくつつけて話を聞こうとする二人。

ゆかり 単刀直入に言うわ。

光一 うん。

ゆかり 光一。

光一 な、なに。

ゆかり …。

光一 母ちゃん。

ゆかり …お父さん、浮気してるかもしれない。

光一 …え？

ゆかり お父さん、浮気してるかもしれない！

光一 …。どうしたの、突然。

ゆかり どうしても気になって…！

光一 …どうして、それを俺だけに…？

ゆかり だって！ 探偵って、そういうことも調査してくれるんでしょ？！

光一 …あー！

ゆかり どうしても相談したくって…。

光一 ああ…。どうしてそう思うの。

ゆかり なんだか最近、おかしいのよ。

光一 おかしい？

ゆかり 態度がちよつとよそよそしいってどうか。

葵（小声） 女の勘ってほんとに鋭いの？

夕矢（小声） うちの家族はバカばかりだ。

光一 ほかに？

ゆかり …最近、冷たいの。今日だって。

光一 なるほどなるほどー。でも、父さんが愛してるのは母さん一人だよ。

ゆかり そうかしら。

光一 うん。誓ってもいい。

ゆかり ほんとに？

光一 専門家が言ってるんだから大丈夫だよ。ははっ。大体、あんな田舎で誰と浮気するんだよ！

ゆかり スナックあけみのきよこママ。

光一 誰？

ゆかり だからきよこママよ。（自分の財布から名刺を取り出して渡す）お父さんの財布の中から出て来たの、これ。

光一 名刺くらいもらうでしょ。

ゆかり でも、気になるじゃない。普段そんなところ行かないのに。

光一 でも、それだけじゃ浮気とは言えないよ。父ちゃんも、たまには飲みに行きたい日くらいあるだろ。

ゆかり お酒ならウチで飲めばいいじゃない。ウチで呑んだほうが安いんだし。

光一 一番良くないのはね。疑うことなんだよ。

ゆかり でも、

光一 母さんだっておもしろくないだろ。浮気してるんじゃないかって疑われたら。

ゆかり わたしが浮気するわけじゃないじゃない。

光一 だから、それなのに浮気してるって思われたら嫌だろう。

ゆかり うん。

光一 だったら信じてあげなきゃ。

ゆかり …いくら？

光一 ん？

ゆかり 料金。

光一 …こんなの仕事のうちに入らないよ！

ゆかり ほんとに？

光一 さ、戻って父さんたちを待とう。

ゆかり うん。

葵のケータイがなる。

葵 もしもし。あ、それは、うん。え？ 別の人に頼んだから、うん。ごめんね。よろしく。

夕矢 なに？

葵 ちょっとウチの「劇団」のことで…

ゆかり、居間に戻ってくる。

光一も戻ってくる。

ゆかり ちょっと、あなた！ いま！

葵 あ、いや、今のはなんでもないんです！

ゆかり わたしの夫、心臓にペースメーカーを入れてるんです。携帯電話の電源は切っただけませんか？

葵 え？

光一 え、電源も切らなきゃダメなの？

ゆかり 話してなくても、電波を出すのよ。ケータイは。

夕矢 それは、古いタイプの機種じゃ…。

ゆかり いいから切りなさい！ 早く！

二人とも、スマホの電源を切る。

ゆかり これで安心ね。

葵 あせった…。

インタホン。

良太(声) こんにちはー。

夕矢 はい。

夕矢、玄関へ。

夕矢と良太、戻ってくる。

良太は上下スエット。

ゆかり あら。

良太 ちよつとラフすぎました？

ゆかり いや、いいんじゃない？

良太 フォーマルとカジュアルの中間の服って持ってないんですよ。

光一 それにしてもずいぶん極端だね。

夕矢 まあ、座ってください。今、お茶入れますから。

良太 あ、おかまいなく。(光一に) あ、あの。

光一 はい。

良太 片桐光一って本名だったんですね。

光一 え、うん。

良太 この前の公演、カッコ良かったですよ！

光一 え、なに、なに？！

良太 だから、この前の…。

夕矢 赤石さん、やっぱりダメです！

良太 え？

夕矢 その格好！ これからホームパーティなんだから、もう少しちゃんとした格好をお

願います。いくらなんでも、それじゃダメです。

良太 あ…すみません。

ゆかり いいじゃない。格好なんて…。

夕矢 だめだ！

葵 そうね！ ちよつと雰囲気台無しね。

良太 え？

葵 着替えてきたら？

ゆかり ちよつとあなたたち…。

良太 あ、いえ、いいんです。隣ですし。着替えます。着替えます。

ゆかり あ、ごめんなさいね。

すこすこ良太、出て行く。

夕矢 赤石さん、向かいの「公園」で浮気調査してる兄ちゃんに会ったんだよ！

ゆかり そんなこと聞いてないけど。

夕矢 ならいいんだ。

ゆかり あんた大丈夫？

夕矢 大丈夫だよ。どうして。

ゆかり なんだか疲れているみたいだから。

光一 仕事、忙しいみたいだよ。

ゆかり まあ、飲食店はどうしてもね。

夕矢 誰のせいで…。

ゆかり ところで…。

光一 なに？

ゆかり 今日は…光一の付き合ってる人が来るって聞いてたんだけど。

光一 え？ えーと。(葵とアイコンタクト) 用事で来れなくなっちゃった。

葵 そうなんです。

ゆかり 残念ね。

玄関のドアが開く。

藤実（声） ただいまー。

夕矢 おかえり。

藤実が買い物袋を持って居間に入ってくる。

藤実 あ、お母さん。お久しぶりです。

ゆかり ひさしぶりね。

藤実 お元氣そうでなによりです。

ゆかり 藤実さん。

藤実 なんですか？ …携帯電話の電源なら切ってますけど。

ゆかり …ならいいけど。

藤実 では、買い物しますね。

ゆかり そのビール。まさかお父さんのじゃないわよね。

藤実 え、お好きだと聞いてますけど。

ゆかり あの人、そういうプリン体が多いものはちょっと…。

藤実 あ、そうでしたか。

ゆかり たしか以前お話したと思いますよ。

藤実 …すみません。うっかりしていました。

藤実、ゆかりと軽く視線を合わせてから台所へ。

ゆかり …。ちよつとお手洗い借りていいかしら。

夕矢 出て、右ね。

ゆかり、出て行く。

一同、ぐったり。

藤実 まだバレてないんだ。

夕矢 疲れるよ、ほんと。

葵 ご協力ありがとうございます。

光一 これ、順調じゃない？

葵 どこが？

光一 そう？

藤実 葵さんは、まだ、光一さんの彼女なんですか？

葵 えーと。光一とは遊びで付き合ってた、今はお隣さんの弟のほうとお付き合いしていることになってる。

藤実 まあ、お盛んね。

夕矢 あ。あれは否定してもよかったんじゃないかな？

葵 今ごろ言われても…。

夕矢 そうだ。お隣さんだって、このマンションの隣ってことにすれば…。

葵 だから今頃言われても！

光一 でもさ。

葵 なに。

光一 ウソとはいえ、こんなことやってるなんて知ったら本当の彼に怒られちゃうんじゃない？

葵 それは大丈夫。

光一 え。

葵 本当の彼とは先月別れたから…。

光一 あちゃー。

葵 …どうでもいいけど、こういう嘘をつき続けることで、私がどんどん傷ついてるってことはわかってほしい。どうでもいいけど。

光一 わかった。

葵 とにかく、あのお隣さん何とかしなきゃ。今思い出したけど、あの人ウチの公演に毎回来ていたから。絶対、演劇の話になる。

夕矢 今から誰か隣に行つて話あわせといだほうがいいんじゃないか。

葵 私が行ってきます。

葵が動こうとした途端、玄関のドアが開く。

重い足取りで潤一郎が戻ってくる。

潤一郎 ただいま…。

光一 お帰り。どうしたの？

潤一郎 母さんは。

夕矢 来てる。

潤一郎 すまないが呼んできてくれないか。

夕矢 トイレだけ。

光一 どうかしたの？

潤一郎 (胸を押さえながら) ダメだ。心臓の機械壊れちゃう。(ふらつき、ソファに倒れこむ)

光一 父さん！

夕矢 母さん！ ちよつと！ 父さんが！

光一 救急車！

葵 うん。

潤一郎 だ、大丈夫だ。ちよつと横になっていけば…。落ち着く、はずだ。

夕矢 ホントかよ！

光一 母ちゃん！ 母ちゃん！

ゆかりも戻ってくる。

ゆかり お父さん！ どうしたの！？

潤一郎 オマエか…。

ゆかり お父さん！

潤一郎 ちよつと機械をぬらしちまってな。

ゆかり 誰か、救急車！

このあたりで、玄関ドアが開く。

潤一郎 いや、いいんだ！ それより。…これを。

潤一郎、震える手でもらった指輪をゆかりに渡す。

ゆかり なに？

潤一郎 開けてみてくれ。

ゆかり ……!

潤一郎 今日は、結婚記念日だろ…。おめでとう。今日はすまなかつたな、怒鳴ったりして…。

正装の良太、居間に入ってくる。

ただならぬ様子にたじろいでいる。

潤一郎 う。(がくりとなる)

ゆかり おとうさん!

良太、びっくりして出て行く。

一同、激しく潤一郎に呼びかける。

しばらくして。

潤一郎 ……なーんちゃって。

一同 ……。

潤一郎 ……どう、サプライズ。

一同 ……。

潤一郎 ……?

光一 このクソジジイ!!

夕矢 やっていいことと悪いことがあるだろ!

一転して、全員、潤一郎に激しく罵詈雑言を浴びせる。

潤一郎 なんだよ、そんなに怒るなよ!

光一 怒るよ。当たり前だろう!!

藤実 不謹慎すぎます!

葵 そうですよ!

光一 母ちゃん、泣いちゃっただろ。

ゆかり (泣いている)

潤一郎 ……あ。

夕矢 女を泣かすなって言ったの誰だよ。

潤一郎 だからサプライズだって。どうせ渡すならドラマチックなほうがいいだろ。(ゆかりに)

あ、いや。すまん。

ゆかり だって喜んでいいのか怒っていいのかわからないんだもん…。

夕矢 それは怒ればいいんだよ! 怒ればいいんだよ!

藤実 夕矢さん。

ゆかり ……。

潤一郎 (ゆかりに) 怒っちゃった?

ゆかり (につこり) ううん。…(ベランダを開けて、指輪を思いっきり投げて) こんなもの、受け取れるかー!

の、受け取れるかー!

潤一郎 あ。

光一 あらら。

夕矢 あー!! (がっくり)

藤実 ……大丈夫?

夕矢 まだローンが残ってるのに…。

玄関のドアが開き、慌しく道雄、良太の順番で居間まで駆け込んでくる。

光一 どうした？
 道雄 急患はどこだ！！
 良太 そこだ！
 道雄 患者は動かすな！
 良太 わかった。
 夕矢 誰だ、あんた？
 藤実 あ、あの…。
 道雄 心配するな。ここは任せておけ！！
 夕矢 だから、あんた誰だ？！
 藤実 あの…。
 道雄 なんだ？
 藤実 大丈夫ですから。
 道雄 え？
 潤一郎 すみません。
 道雄 え？
 良太 あれ、あなたさつきガクって！？
 藤実 すみません。治ったみたいです。
 道雄 え。
 藤実 治ったみたいですよ。
 良太 え、でもガクって…。
 潤一郎 ご心配おかけしました。
 道雄 なんだ大丈夫なの！？
 葵 あの、あなたは…。
 良太 僕の弟です。
 葵 …（間の悪さに愕然）おとうと！？
 夕矢 こんなについてない人（葵）はじめて見た。
 道夫 赤石道雄です。
 藤実 お医者さんなんですか。
 道雄 いいえ。
 藤実 え？
 道雄 医大には通っていますけど。
 藤実 えっと…学生さん？
 道雄 予備校にも八年通いました。
 藤実 なるほどね。
 ゆかり えーと…。この人、あなた（葵）の…。
 道雄 ？
 葵 はい…。
 ゆかり 今日はバイトじゃなかったの？
 道雄 え。俺が？俺はバイトなんて…。
 葵 （道雄の言葉をふさぐように）道雄さーん！！（と、道雄に抱きつく）
 道雄 なんだなんだ。
 葵 ……こんにちは！
 道雄 こ、こんばんは。えっと、あなたは…。
 葵 「あなた」って…。葵ってよんで。
 道雄 え？

葵 葵って呼んでって言うてるでしょう！！？ 照れ屋なんだから！！
 道雄 葵…さん。
 良太 道雄くん！（無理やりイチャイチャしようとする）
 …！
 道雄 なに？ これ、なに？
 光一 …まずいな。
 藤実 え？
 光一 葵さんが少しヤケクソになってる。
 良太 え！ おまえ、彼女って。そうだったの…！
 夕矢 またややこしいことになってる…。
 ゆかり じゃあ、みんなホームパーティーに参加ってことでいいわね。
 道雄 え、え？
 良太 （動揺して）み、道雄…。
 道雄 なに。
 良太 ちよつといいかな。
 道雄 なんだよ。
 良太 ちよつと来て。…あ、すぐ戻ってきますから。

道雄と良太出て行く。

夕矢 なんだ？
 葵 あ。…そういえばわたし、公演のたびにあの人からお花もらってる。
 光一 え？ あの人の？
 葵 お兄さんのほう…。
 光一 役者でもないのに？
 葵 そう、役者でもないのに。
 夕矢 …そういうことか。
 潤一郎 公園にいる相手にわざわざお花を渡しに来るなんて。そうとうだな。
 ゆかり それって、花壇の花、勝手に摘んじゃってるってこと？
 光一 ちよつと待って。何か、聞こえない？
 ゆかり ケータイ？
 光一 いや、人の話し声みたいだけど…。
 藤実 隣だと思う。
 光一 え？

藤実、ベランダのドアを開ける。
 雨の音に混じって、赤石兄弟の口論が聞こえてくる。
 一同、聞く。

良太の声 なんて言ってくれなかったんだよ！
 道雄の声 だからなんのことだよ！
 良太の声 なんでしらばつくれるんだよ！
 道雄の声 知らないからだよ！
 良太の声 葵さんと、つきあってるんだろ！
 道雄の声 誰だよ、葵さんって！
 良太の声 ……なんでしらばつくれるんだよ！
 道雄の声 知らないからだよ！

良太の声 葵さんと、つきあ：

藤実、たまらずベランダをしめる。

一同 …。

夕矢 (手をパンとたたく。がんばって明るく) さ、パーティだよ！

ゆかり やっぱり良くないんじゃない？

潤一郎 そうだなあ。

ゆかり わたし、ちよっと行ってくるわ。(ドアに向かう)

光一 (ゆかりを止める) え、ちよっと待って！ 待って！

ゆかり なに？

光一 母ちゃんが行ってもしょうがないだろ。

ゆかり でも。

潤一郎 そうだ。お前が行ってどうするんだ。

光一 そうだよ。

潤一郎 ここは俺が。(ドアに向かう)

光一 ちよっと待ってよ！

藤実 やっぱり、当事者が行くべきじゃないから。

夕矢 当事者？

藤実 葵さん。

葵 ああ…なんだかわたし、二人の男に言い寄られてモテモテみたいな気分になって

きた。

光一 葵さん、しっかり！

葵、とりあえず出て行く。

ゆかり でも、おかしいわ。一緒に住んでて気づかないなんて。

光一 え？

潤一郎 警察なら家を空けることも多いだろう。

ゆかり それにしても。

夕矢 とにかくさ、これで親子水入らずだよ。

藤実 大丈夫かしら…。

夕矢 大丈夫だって。これ以上面倒なことにならないよ。

ドアの開く音。

夕矢 誰だ？

亜希子が入ってくる。

亜希子 ちよっと考えたんだけど、わたし劇団辞める！

夕矢 最悪だ！

光一 え？ 次の公演に出るのやめるから。

光一 え？ なに言ってるんだよ。

亜希子 やめる！ 団長や葵さんにも伝えておいて。

光一 なんだよ、突然！

亜希子 だって…。もう信じられないんだもん。それだけ。帰る！
 光一 待てよ。(亜希子の腕をつかむ)
 亜希子 離してよ！
 光一 やばいだろ、それは！
 夕矢 兄ちゃん、少なくともここじゃまずい。
 光一 あ、外で話をしよう。
 潤一郎 待ちなさい。
 亜希子 帰る。
 光一 よし、行こう。
 潤一郎 おい、待てよ！
 光一 (止まる)
 潤一郎 光一、今の話、なんだ。
 光一 え？なにが？
 潤一郎 劇団とか、公演とかいう話だよ。
 光一 そう聞こえた？聞き間違えたんじゃない？
 潤一郎 確かに言った。なあ。
 ゆかり ……言った。
 潤一郎 ほら。…まだ続けてるんだな。
 光一 しつこいなあ。続けてないって。
 潤一郎 母さんと約束したんじゃないのか。もう演劇なんかやらないって。
 光一 したした。演劇なんてするわけないじゃない。
 潤一郎 亜希子さん。
 亜希子 はい。
 潤一郎 光一は演劇を続けているね。
 亜希子 ……(一度、光一のほうを見て)はい。
 潤一郎 ほら見ろ。おまえ、母さんがどれだけあの演劇で傷ついたかわかってるのか！？
 光一 ……
 潤一郎 今すぐ責任者の人に言って役を下ろしてもらおう。
 光一 今からじゃ無理だよ。
 潤一郎 そっちの都合なんか知ったことか！
 光一 でも…。
 潤一郎 なあ、母さん。
 ゆかり ……いいんじゃない？
 光一 え？
 潤一郎 ほら、母さんだって悲しんでるんだぞ。
 光一 え？
 潤一郎 いいんじゃない。演劇やってたって。
 光一 ……いいの？
 潤一郎 うん。
 光一 おまえ、あんなに反対してたじゃないか。
 潤一郎 だってあの時は仕事もせずに演劇ばかりやってたから。今はちゃんと仕事しながらやってるんだから。いいんじゃない。
 潤一郎 そうなのか。
 光一 うん。
 光一 母さん…。

夕矢と藤実、握手。

ゆかり どうしてそんなびっくりした顔してるの。

光一 絶対許してくれないと思っただから。

ゆかり どうして？

光一 だって…。

ゆかり だって趣味でやってるんでしょ？

光一 シュミ？

ゆかり あなたもいい大人なんだから、趣味の一つや二つ、あつて当然じゃない。

光一 ……そうだね。

夕矢 なんだ。意外とあつけなかったな。

藤実 だから先に言えばよかったのよ。

光一 えーと…。

ゆかり なに。

光一 例えは…なんだけど。例えはね、俺がバイトとかしながら演技で食っていかうとし

ていたら、母ちゃん許してくれた？

ゆかり それはむりよ。

光一 ……だよ。

ゆかり やっぱりあなたにも早く結婚してほしいし。

光一 そうか。

ゆかり 今度のお嫁さんは素直な子だといいわねー。(亜希子に) あなた？

亜希子 え？

夕矢 なんだよ。それじゃ藤実さんが素直じゃないみたいじゃないか。

ゆかり そんなこと一言も言っていないけど。

藤実 いいんですよ。

ゆかり 早く孫の顔も見たいしね。

光一 それは、夕矢に言つてよ。

ゆかり まだ当分先だつて言うのよ。

藤実 それより食事にしましょう。

夕矢 ああ。

ゆかり それじゃあ、お隣の皆さんも呼びましょ？

夕矢 え、呼ぶの？

ゆかり 当たり前でしょう。どうなったか気になるじゃない。

夕矢 気になるといえばたしかに気になるけど。

亜希子 あの。

夕矢 どうしたの？

亜希子 わたし、ほんとに次の公演に出ないつもりなんだけど…！

光一 あ、忘れてた。大変だ。だめだよ、それは。

亜希子 そんなことない。どうせ私なんかいてもいなくても同じだと思ってるんでしょ？

光一 そんなことないよ。なんでだよ。

亜希子 ……なんですって。

ゆかり だれ、この人？

潤一郎 光一の…二番目の、彼女だ。

ゆかり 二番目！？

亜希子 あんたのせいでしょう。

潤一郎 それがばれたんだ。

ゆかり そりゃ駄目よ。光一。

夕矢 父さん、違う…。

光一 おまえは葵さんの本当の恐ろしさを知らないんだよ。

亜希子 いいもん。もう帰るから。

光一 駄目だつて。

亜希子 どうして芝居のことになったとたん、そんなに一生懸命になってんの？

光一 いや、そうじゃなくて。葵さんが…。

亜希子 そんなに葵さん葵さんって言うなら、葵さんと付き合ったらいいじゃない。

光一 …まいったなあ。

ゆかり 葵さんって、さっきの？

潤一郎 ああ。光一とも付き合ってるんだ。

夕矢 父さん。

ゆかり え、どういうこと？ あの人の隣の弟さんと付き合ってるんでしょう。それでお兄

ちゃんの方も言い寄られてて、おまけに光一にまで…。

潤一郎 ああ。

ゆかり なんてけがらわしい…！

光一 いやいや、葵さんはそんな人じゃないよ。

ゆかり あんた、ちゃんと調査したの？ 得意なんでしょう？

亜希子 どうして葵さんのフォローはするのにわたしのことはほったらかしなの？

光一 ー、なんだかわからなくなってきたよ。もう全部言っているんだっけ？

夕矢 いいんじゃないか？ もう許してもらったんだし。

藤実 そうね。光一さんは探偵ですもの。

光一 え？

藤実 ちゃんと「就職」しているんですから。それだけは忘れないくださいね。

ゆかり なに言ってるの？

藤実 もっとお兄さんは堂々としてくれればいいなって思っただけです。

光一 え。ああ。

ドアが開く音。

葵（声） 失礼します！

光一 なんか来た！

良太・道雄（声） 失礼します！

夕矢 え？

葵、良太、道雄の三人が入ってくる。

良太はなぜか植木屋っぽい格好。（ねじり鉢巻・作業ズボン・グンゼのシャツ）

道雄は白衣。

葵 失礼します。

良太 失礼します！

道雄 失礼します！

夕矢 な、なんだその恰好は！

良太が「さりげなく」夕矢に部屋の隅に押し込む。

良太（小声）…ここは、俺たちに任せてください。

夕矢 は？！

良太 (小声) 話は全部聞きました。

夕矢 なに？

ゆかり あの…。

良太 なんてしようか？

ゆかり そんな服しかなかったの？

良太 はい。作業着ですみません！

ゆかり 作業着？

良太 (緊張) いや、あの俺たち、葵姉さんの弟子なんすよ。なあ！

道雄 (緊張) お、おう！

良太 (緊張) だ、だから付き合つてるとか言つてたのは仕事上のお付き合いで…なあ！

道雄 (緊張) お、おう！

良太 そうですよ、姉さん！

葵 そうよ。…植木屋の弟子よ！

光一 あの…。

ゆかり ねえ…。

良太 なんてしようか！

ゆかり あなた、警察の人じゃなかったの？

良太 非番の日は植木屋つす。

ゆかり 公務員が副業しちゃだめなんじゃないの？

良太 内緒つす。

夕矢 たしか…弟さんって医学部って言っていますでした。

道雄 医学部つす。

夕矢 植木屋の弟子なんですか？

道雄 樹医学科つす。

夕矢 獣医？

道雄 じゅ、樹医つす。

ゆかり えーと…。医者卵じゃなかったの？

道雄 医者は医者でも木のお医者さんつす。

夕矢 え。

道雄 医者は医者でも木のお医者さんつす！

夕矢 樹医…？ 樹医なの？

良太 だ、だから付き合つてるとか言つてたのは、仕事上のお付き合いで…なあ！

道雄 お、おう！

良太 そういうことなんですよ。片桐さんのお母さん！

ゆかり はあ。

良太 さあパーティです。

道雄 パーティです。

夕矢 この、この状態でやるの？

道雄 なんなの、これ…。

葵 あれ、亜希子！ なんてあんたいるの？

亜希子 …わたし、次の公演に出るのやめます！！

葵 …なんだ、そんなこと。

光一 え？

亜希子 ええ！？ 光一と葵さんのせいですよ！

光一 別に誰のせいでもいいけど。

道雄 いいの？

道雄 (小声) 兄ちゃん、いいの？ (ご両親が聞いているけど)

良太 あ。アネさん！（ご両親が聞いてます！）

葵 あ！…もう、あんた帰ってって言ったでしょう！！

亜希子 ええ！？

光一 あ、いや、待ってよ。

葵 （両親に）あ、あの…。コウエンっていうのは三丁目の公園のことで、この子は…

植木屋で新入りなんです！

光一 葵さん…。

亜希子 植木屋？ 私が…？

葵 良太君！ 言ってやんなさい！

良太 おまえは新入りのクセに生意気なんだよ！

道雄 そうだ！ 生意気なんだよ。

亜希子 え？ なに？

葵 この子、この部屋から追い出して。

良太 へい！

光一 葵さん！

亜希子 なに？ なに？

葵 早く！

光一 葵さん！ もういいんだ！

葵 え？

光一 もういいんだ。

葵 え。母ちゃんが芝居のこと、許してくれたんだよ。

光一 え。

葵 許してくれたんだよ。芝居のこと！

光一 ……そうなの？

葵 ああ。

光一 よかった…！

葵 そうなんすか？

良太 うん。

光一 やりましたね！

良太 ああ。

光一 あのお！！

亜希子 なに！？

葵 わたしの話を聞いて…。

亜希子 なによ。

葵 だからー！

ぶーん、ぶーん、とケータイのバイブ音が聞こえてくる。

ゆかり ちよつと待って！

亜希子 なんなの？！

ゆかり ……何か聞こえる。携帯電話。

夕矢 ……隣だろ。

潤一郎 （動揺）あ、ああ。

ゆかり いや。この音。もつと近い。

夕矢 え？

ゆかり わたしにはわかる。

光一 え、でも…。

静まる一同。音はとまっていたが、再び鳴り出す。

ゆかり ほら。誰、電源切ってないの?!

光一 俺じゃないよ。さっき切ったの見てただろ。

夕矢 俺も違う。

藤実 私も切ってますよ。

ゆかり (亜希子をにらむ)

亜希子 え? え?

光一 亜希子、とにかくスマホ電源切って。

亜希子 でも、着信してない…。

ゆかり はやく!

亜希子 は、はい(電源を切る)

夕矢 二人も。

良太と道雄(ケータイの電源を切って見せる)

バイブ音、止まる。しかし、再び鳴り出す。

動揺する一同。

潤一郎 …ちよつと、トイレ。

ゆかり あなた。

潤一郎 なんだ。

ゆかり …どうして、トイレに行くのにそのハンドバッグが必要なの?

潤一郎 どうしてって、別に。

ゆかり ちよつと見せて。

潤一郎 なんだだよ。

ゆかり 中身見せて。

潤一郎 いやだ。

ゆかり どうして? 見せてって言うてるでしょ。

潤一郎 ないと落ち着かないんだよ!

ゆかり 貸して!

潤一郎 やめろ!

潤一郎のバッグを二人で引っ張り合う。

ゆかり、ハンドバッグの中身を床にぶちまけてしまう。

その中にはスマホもある。

ゆかり (拾う)…これは。

潤一郎 …。

ゆかり どうして…。

潤一郎 いや、それは、その…。

ゆかり …。

ゆかり (徐々に詰め寄る)これは、なんですか?

潤一郎 (あとずさる)さあ。

ゆかり これは、携帯電話ですよね?

潤一郎 携帯電話じゃない。スマートフォンだ。
 ゆかり どうして、あなたのハンドバックから出てきたんですか。
 潤一郎 さあ。誰かが入れたんだろ。やめろよ。胸に近づけるなよ。
 ゆかり じゃあ、どうしてその誰かは、わざわざあなたのハンドバックに自分の携帯電話を
 入れたんですか？

潤一郎 さあ。俺が入れたんじゃ…。

ゆかり いつから持ってたの？

潤一郎 さあ。

ゆかり この携帯電話を使って、誰と話してるの？

潤一郎 さあ。

ゆかり 怒らないから、…正直に言って。

潤一郎 わからないなあ。

ゆかり やさしく言ってるうちに白状しなさいよ！！！！

潤一郎 うう…。

ゆかり 信じられない！

夕矢 どういうことだよ、父さん。

光一 父ちゃん。

潤一郎 おまえ（光一）がすぐ戻ってくるから電源切り忘れちゃった…！！

光一 俺のせい？

ゆかり ずっと信じてたのに！

潤一郎 いや、違うんだ。違うんだよ。

ゆかり 光一、絶対大丈夫だって言ってたじゃない！

光一 あ、いや。

ゆかり 離婚よ。もう、離婚よ！！

ゆかり、部屋を出る。

藤実 お母さん！

潤一郎 おい！ 待て！ 待てって！

夕矢 父さん、どういうこと。これ！

潤一郎 …。

夕矢 父さんのなの、これ。

潤一郎 気がついたら入ってたんだよ。

夕矢 父さん！

潤一郎 わかったよ。俺のだ。

光一 ケータイとかダメなんじゃなかったの。

潤一郎 機械から2センチ以上離していれば大丈夫なんだ。

夕矢 それ使って、誰と話してたんだよ。

潤一郎 …。

夕矢 俺は身内として恥ずかしい。

光一 夕矢。

夕矢 どうするんだよ、母さん。

光一 そんなに怒るなよ。父ちゃんだって反省してるんだからさ。ねえ。

潤一郎 してるよ。

夕矢 父さん…。

道雄 兄ちゃん。

良太 なんだ。

道雄 俺たち、どうしよう。
 良太 ……アネさん。
 葵 アネさんはもう終わり。
 良太 え。
 道雄 あんなに練習したのにね。
 藤実 それにしても…いつからお持ちなんですか？
 潤一郎 ……結構前から。
 夕矢 ……年前から。
 潤一郎 え？
 夕矢 ……年前から。
 潤一郎 え、いつから！
 夕矢 ……八年前だよ。光一が大学卒業してからだから。
 夕矢 八年！？ そんなに、長いこと母さんをだましてきたのか。
 潤一郎 だましてたわけじゃない。言わなかっただけだ。
 夕矢 ひどいな。
 光一 すごいな。
 夕矢 は？
 光一 いや、すごいよ。そんなに隠し通してきたんだから。俺なんかまだまだ。
 夕矢 兄ちゃんはたったの三年だもんな。
 藤実 夕矢さん。
 夕矢 また母さん探さなきゃ。
 光一 この天気だし、心配だな。
 潤一郎 それは大丈夫だ。
 夕矢 は？
 潤一郎 あいつにはこういう知らないところを歩き回る勇氣はない。せいぜい、このマンシ
 ヨンの入口でタバコを吸うのが精一杯だ。二、三本吸ったら戻ってくるさ。
 夕矢 ずいぶん樂觀的だね。いまの劍幕見てたろ。
 潤一郎 三十年付き合ってるんだ。それくらいわかるさ。
 藤実 だからって、許してもらえないわけじゃないですよね。
 潤一郎 無理だな。
 亜希子 あの…わたし、わたし、次の芝居出るのやめようと思うんですけど…。
 葵 やめれば？
 亜希子 えー！？
 光一 葵さん！
 葵 なによ。
 光一 どうして、そんなにすぐ納得しちゃうんだよ。
 葵 引き止める理由なんてないじゃない。
 光一 この前俺がちよつと弱音をはいただけでグーで殴ったじゃん。
 葵 それは、あんたには才能があるから。言いたくないけど。
 亜希子 じゃあ、私には才能がないってことですか？
 葵 そうよ。
 光一 葵さん。
 良太 あんまり決め付けるのは良くないと思うな。よかったよ、この前の見たけど。
 葵 部外者は黙ってて。
 良太 ……
 亜希子 ……

葵 私には、少なくとも本番目の前にして簡単にやめるなんて言う人に才能があるとは思えない。

光一 それはそうかもしれないけどさ。

葵 ウチの看板役者とちよっと付き合ってるからっていい気になって…。私はあなたみたいなき、何人も見てる。

光一 言いすぎだよ。

葵 あんたはいいわよ。才能があるから。

亜希子 わたしは別にいい気になんかなってません。

葵 大学のサークル活動の延長みたいな気分で参加されても困ります。

光一 葵さん…。

亜希子 そんなことないです。そりややめるって言ったのは悪かったかもしれないけど…、ほんとに役者として頑張りたいんです！

葵 あなたには無理よ。

亜希子 葵さんは、役者になれなかったから妬んでるんです！

葵 あなた…、

光一 もうやめよ！ こういう話は。ほら、赤石さんたちも困ってるじゃない。

良太 え、僕らは全然。

道雄 うん。うん。

夕矢 もういいよ。そんな話は。

潤一郎 いや、よくないぞ。

光一 父ちゃん。

潤一郎 光一。オマエは…演劇を趣味でやってるのか？

夕矢 父さんは黙ってるよ。

潤一郎 どうなんだ？

光一 ……まいったな…。

潤一郎 答えろよ。

光一 ……まいったなあ。

潤一郎 趣味でやってどうにかなるような甘い世界なのか。役者っていうのは。

長い沈黙。

玄関のドアが開いて、ゆかりが戻ってくる。

夕矢 おかえり…。早かったね。

ゆかり 誰かタバコ、持ってない？

潤一郎 (タバコを差し出す) ほら？

ゆかり (手で払う)

潤一郎 おい。

光一 ごめん、母ちゃん！

ゆかり ?

光一 実はさっきのスマホ。(手に取る) これ。俺のなんだ！

夕矢 兄ちゃん？

ゆかり は？

光一 だからこのスマホ、俺のなんだ！

ゆかり ……お父さんをかばってるの？

光一 違う。俺のなんだよ！

ゆかり あなたはもう持つてるでしょう？

光一 二台目なんだ。二台持ちなんだ、俺。

ゆかり (疑いながら) どうして。

光一 ありがとう、そしてごめんなさい、父ちゃん！

潤一郎 …？

光一 俺が二台持つてること…亜希子に知られたら浮気がばれちゃうから！ 罪をかぶってくれたんだろ！ な。父ちゃん！

潤一郎 …バカなこと言うな。

光一 もういいんだよ。俺のせいで父ちゃんたちがケンカするの、耐えられないよ。

潤一郎 光一…。

ゆかり あんた…。

光一 俺、亜希子のことはあきめる。

亜希子 光一…。

光一 (亜希子に) ごめんな。こんなことしてしまつて。

亜希子 そんなこと、

ゆかり あなた(潤一郎)…、

潤一郎 バカなこと言うな。それは俺の…。

光一 だから、もういいんだ。ウソつかなくつても。父ちゃんは、かっこつけすぎなんだよ！

潤一郎 光一…。

ゆかり 光一。あんた、気持ちは嬉しいけど…。

光一 母ちゃん…。

葵 光一…あんた、やっぱり演技がくさい！

光一 え。

葵 勢いに頼りすぎ。いくらなんでもこんなところでお芝居の稽古なんてしなくてもいいんじゃない。

光一 葵さん？

葵 あんたの熱演のせいで、すっかり亜希子ちゃんが涙目じゃない。かわいそうに。

亜希子 そんなことないです。

葵 無理があるでしょ。そんなの。そのスマホが出てきて一番ビックリしてたのあんたじゃない。

光一 …。

葵 そんなんだからアンケートに、演技がうるさいとか書かれるのよ。

光一 え？

葵 (光一からケータイを取り上げる) これは私のです。

一同 え！？

葵 私は、道雄さんに二つ目のスマホがあることがバレそうになった。光一は私のことが好きなんです。ですよね、お父さん？ 困ってる私を見かねて、光一は私のスマホをお父さんのハンドバックに隠した。そこだけを見たお父さんは、光一が二つスマホを持っていると勘違い。息子をかばうつもりで自分がそのスマホの所有者であるように振舞った。そういうことよ。光一さんのお母さん。

光一 葵さん…。どうして。

葵 でもいいの。なぜなら私、そろそろ道雄さんにも飽きたから。私はモテモテで男には不自由したことがない！ 光一さんも、お父さんも、私なんかのために、みつともない真似することないわ！！

ゆかり (さすがに混乱している) え、じゃあ…その携帯電話はあなたのなの？

良太 (葵からケータイを奪う) いやあ、それはどうかな！

葵 え！

良太 もしかしたらこれは、僕のかもしれませんよ。

ゆかり (ますます混乱) ええっ？

良太 だってそうでしょう。なぜなら…葵さんはそんな遊び人じゃないからです！ 葵さんはすばらしい人です。葵さんがいくらモテモテでも、二台のケータイをとつかえひつかえして男遊びをするような人ではないからです！ ですから、それは葵さんのモノではありません！

一同 ……

藤実 それじゃあ、どうして良太くんのケータイを、みんな自分の物だって言ってるの？

良太 ……(道雄に) パース！

道雄 え！！？ 俺！？ このケータイは…ダメだ、何も思い浮かばない。(夕矢に) パース。

夕矢 え？ 困る！ 誰か！ …誰か！ (誰かに渡したいが誰も受け取らない)

ゆかり (夕矢からケータイを奪う) もういい。

光一 母さん。

ゆかり 誰かのなんて、中身見てみればすぐわかるじゃない。

一同 (それもそうだ) ……

ゆかり、ケータイをいじる。

見守る一同。

ゆかり (悲しそうに) ……どうやって見たらいいの？

一同 ……

亜希子 ……もろもろ履歴を読めばいいんですよ。

光一 亜希子…。

ゆかり 読んでちょうだい。

亜希子 (ゆかりからケータイを受け取る)

光一 亜希子…。

亜希子 (葵を一睨みして) 要するに、このスマホの持ち主がわかるようなところを読めばいいですよ。…六月一日…かずみさんから。昨日は楽しかった。また一緒に遊ぼうね。金曜日フォーミーでいいのよね。六月七日…ヨウコさんから。また弟さんのお店に行ったら、クッキー缶もらっちゃった。かさばるんだけど断りにくいんだよね。

夕矢 (咳き込む)

亜希子 そっちに行っている？ いっしょに食べない？ ……いまには「もちろん」って返信してる。この持ち主、自分の家に女の子入れてますよ。六月十日…なつちゃんから。昨日、フォーミーと一緒にいた人、だれ？ 彼女？ ひどくない？ 遊びなのはわかってたけど。…あ。この人も、家に入れてる。

光一 もういいよ。

亜希子 フォーミーっていうのは稽古場の近くにある喫茶店です。実家のほうにそういうお店ありませんよね？

ゆかり ないと思うけど…。

亜希子 (泣きそうになってる) 少なくとも、こっちの人間のスマホです。そして、私の女の子の名前、ほとんど知ってるから、これのスマホは…このスマホは…。

光一 亜希子…。

亜希子 光一の…ばかー！

ベランダを開けて、思いっきりスマホを外に投げつける。

潤一郎 あー！（ベランダに駆け寄る）

光一 （一瞬遅れて駆け寄る）あー！ 俺の、スマホ！

葵 （さらに遅れて駆け寄る）あー！ わたしの！

良太 （さらに遅れて駆け寄る）あー！ ボクの！

それぞれ、がつくり。

道雄、藤実、夕矢もなんとなく続く。

一同 ……

一同 ケータイを見送って、一斉にゆかりの様子をうかがう。

ゆかり ……

亜希子 （ゆかりに近づいて）今のスマホは光一のものです！

ゆかり ……

ゆかり、寝室に引っ込んでしまう。

亜希子 よし。

光一 亜希子。助かったよ。

亜希子 光一…。わたし、なにかをつかんだ気がする。

葵 え。

亜希子 それじゃ、みなさんお疲れ様でした。

光一 おつかれ。

亜希子、出て行く。

葵 ……やられた。

光一 え。

葵 あの子、アドリブであそこまでできるなんて。

光一 いや…。台本はあった。

葵 え。

光一 さっき亜希子が言っていたの、全部俺のスマホの中のメール。（自分のスマホを出して）

こっちの。

葵 え。

光一 何度もパスワード、変えてんのに。

葵 え。じゃあ、あの子、光一に届いたの、全部覚えていたっていうこと？

光一 ああ。

葵 それはそれですごい…。じゃなくて怖い。

光一 だよな。

葵 あの子、何をどこまで理解してたんだろう。

道雄 すごい…。

良太 え。

道雄 （拍手）すごい、感動した！

葵 なにが？

道雄 こんなに間近で本職の役者の演技が見られるなんて…。これが劇場だったら、いくら

とられるかわからないよ！

良太 ……どうしよう俺、参加しちゃったよ！

道雄 すごいよ！ 野球で言ったらイチローとキャッチボールするみたいなもんだって。

葵 いや、ウチそんなにすごいから。

光一 まあいいじゃない。とにかくさ、これで何とかなつたかな？

夕矢 なつてない。

光一 え？

夕矢 母さんをこのままにしておく気か？

光一 ……そうか。

夕矢 母さん！ 母さん！ もういいだろ。いまの携帯電話は父さんのじゃなかったんだから。出て来いよ。

藤実 夕矢さん。

夕矢 力づくで出そうか。

光一 そういふ問題じゃないだろ。

夕矢 じゃあどうするんだよ。このままじゃパーティできないだろ。

藤実 だめよ。ちゃんとお母さんが気持ちよく出てきてあげられるようにしなきゃ。

光一 母さん。ごめん、心配かけて。でも、父さんは浮気してないんだし、出ておいでよ。

ゆかり みんなで結婚三十周年、祝おうよ。

光一 ……

夕矢 だめか。

光一 鍵はつけてないぞ。

藤実 だからそういう問題じゃないんだってば。

夕矢 夕矢さん。力づくで部屋から引つ張り出されて、その引つ張り出された相手と楽しくお食事したいなんて思う？

光一 そうか…。心の鍵がかかっているんだね。

夕矢 父ちゃんもなんか考えろよ。

光一 無理だ。あいつがこうなつたら、三日は人前に出てこない。

潤一郎 あきらめるなよ！

光一 そんなこと言つたつて。

ゆかり 母ちゃん！ 出てきてよ。

良太 ……

光一 まるで…天岩屋戸ですね。

良太 ……

藤実 ……

良太 ……

古事記に出てくる話で、天照大神っていう神様が、弟神の乱暴に耐え切れなくなつて洞窟にこもってしまったんです。アマテラスって言うくらいだから、この神様が洞窟の中に入つてしまうと世界が真っ暗になつてしまつて、みんな困り果てたんだそうです。

なるほどね。

藤実 ……

良太 ……

道雄 ……

夕矢 ……

光一 ……

良太 ……

道雄 ……

良太 ……

道雄 ……

良太 ……

道雄 ……

良太 ……

道雄 さっきだって大丈夫だって言ってたじゃん。

光一 なに。どうやったの!?

道雄 兄ちゃん…。

良太 がんばれ!

道雄 :他の神様は、岩屋戸の前で宴会を開いたんです。自分のことを無視された天照大神は、結局寂しくなつて出てきてしまいました。

良太 道雄。

道雄 言えたよ、兄ちゃん…。

光一 つまり…。

夕矢 やっぱパーティじゃないの?

光一 オマエは黙ってる。

夕矢 どうして!?

藤実 つまり…ここでみんなが楽しそうに振舞えばいいってこと?

光一 どう、父さん。

潤一郎 無理だな。ますますへそを曲げるだろう。

葵 私、ひとつ思いついたことがあるんだけど。

光一 え、なにになに?

葵 お父さんが、さっきやってた「心臓がー」ってやつ。

光一 ああ。

葵 きつと血相変えて出てくるんじゃない?

光一 それだ。それなら自然に母さんが出てこられる。

潤一郎 なんだ。またやるのか。

夕矢 父さん。

潤一郎 わかった。…行くぞ。(わざとらしい演技) :あ、いた。いた。いた。し、し、

一同 し、心臓が!!!

潤一郎 …。

潤一郎 心臓が!!!

光一たち (仕方なくあわせる) :父ちゃん! 父ちゃん!

戸惑いつつも、潤一郎に呼びかける一同。
ゆかり、ドアを開けたところで、

夕矢 やめろよ。そんな下手くそな芝居に騙されるバカなんていないよ!

居間にいる人間の目がいつせいにゆかりに向けられる。

遅れて、夕矢も気づく。

ゆかり、悲しそうにドアをしめる。

ゆかり (恥ずかしい)

光一 母さん!

みんな一斉にドアのところへ。そしてゆかりに呼びかける。

夕矢 :ねえ、今の俺のせい? 俺のせいなの!?

葵 なんてことしてくれたのよ。

光一 もう少しだったのに。

夕矢 まさかあんな演技で騙されるなんて思わないよ…。

藤美 お母さんは騙されたいんだと思いますよ。

夕矢 どういうこと？

光一 父ちゃん。なんだよ、いまの。

潤一郎 だめだ……。緊張する。

光一 最初のときは、あんなに上手に出来てたじゃん。

潤一郎 あまり俺を買いかぶるな。

葵 もう一回やりましょう。

光一 なにを？

葵 いまのよ。

夕矢 もう二回も同じパターンで騙されてるのにな？

潤一郎 またやるのか？

葵 大丈夫。

夕矢 母さんだって三度も騙されるほどバカじゃないよ。

良太 どうかな？

道雄 ちよつと無理があるんじゃないかな？

藤美 やりましょう。

夕矢 え？

藤美 (少し声を張って)お母さんは聡明な人です。お父さんのためだったら、きっと何度でも騙されてくれますよ。

潤一郎 藤美さん。

葵 押し切るしかないと思うんです。

夕矢 でも……。さっきみたいのじゃ、ほんとに母さんがバカみたいだ。

藤美 夕矢さん。

夕矢 やるなと言ってるんじゃない。もつとそれっぽく出来ないのか？

光一 お、やつと乗り気になってきた？

夕矢 俺は、職人だ。中途半端なことはしたくない。

良太 かっこいい！

夕矢 は？

道雄 がんばって！

光一 おまえらもやれよ。

良太 いや、俺たちは。

道雄 応援してます！

良太 そうそう。

葵 見てるだけならお金とるよ。手伝って。

良太 ……が、がんばります。

道雄 えー！

葵 もう一度やりましょう。

以下、声を潜めて。

光一 父ちゃんは、病人なんだから、あんまり声を張らない。わかった？

潤一郎 わかった。

光一 俺が合図する。合図したら、みんなで父さんに声をかける。簡単だろ？

良太 それなら。

光一 じゃあ、いくよ。父さん。

光一 (まったくさつきと一緒に) ……あ、いた。いたた。いたた。し、し、し、心臓が！！
光一 ……一回止めます。

一同（ゆかりも）（がっかり）…。
 ゆかり（小声）もう！もうちよつとうまく出来ないの…。
 藤実 いまお母さんの声？！

また、みんなドアに近づいて聞き耳。

ゆかり

…。

光一

手ごたえはあった。

夕矢

ほんとか。

光一

多分。

葵

もう一回！

光一

葵さん。

葵

なに？

光一

どうして、葵さん、そんなに一生懸命やってくれてるの？

葵

チャンスだからよ。

光一

え。

今日のあんたを見ててはつきりわかった。今まであんたは、ご両親に後ろめたい気持ちでお芝居をやってたんだって。

光一

そんなこと、ないよ。

葵

ほんとに？

光一

うーん。

葵

わたしは制作として、劇団の仲間として、いまの状況を見過ごすわけにはいかない。

光一

葵さん。

葵

ウチの劇団としても、光一には売れてもらわないと困るし、あんただって、いつま

光一

でも居酒屋のアルバイトってわけにはいかないでしょう。

潤一郎

そうだね。

光一

光一…。

葵

ありがとう、葵さん。そこまで考えて。

藤実

いいのよ。

夕矢

葵さん。それは…。

潤一郎

言っちゃった。

光一

おまえ、アルバイトってなんだよ！

夕矢

うん？ あ！

葵

それは言っちゃダメなやつなのに！

藤実

え？ なに？ 許してくれたんじゃないの？

葵

お母さんが芝居を許してくれたのは、光一さんがちゃんと就職しているからです。

夕矢

どういうこと？！

葵

あくまで条件付きです！

潤一郎

そんな！

光一

…。

潤一郎

父ちゃん。

光一

…探偵事務所に就職したっていうのは、ウソだったのか？

潤一郎

ウソじゃないよ。

光一

…仕方ない奴だな。おまえは。

潤一郎

ウソじゃないって。

光一

だが、おかげで俺はオマエに助けられたんだよな。

光一

父ちゃん？

潤一郎 仕方ないな。
 夕矢 怒らないの？
 潤一郎 怒れるかよ。
 夕矢 ……ちよつと待ってよ。じゃあ、父さんは兄ちゃんが仕事もしないで芝居を続けることに賛成しちゃうのか？
 潤一郎 ……俺にはなにも言う権利はない。
 夕矢 なに言ってるんだよ。母さんはどうなるんだよ。兄ちゃんには早く落ち着いてもらいたいんじゃないのかよ。…父さん。
 潤一郎 ……
 夕矢 母さん！ 母さん。聞こえてるんだろ。兄ちゃん、就職もしてないんだ。
 葵 夕矢さん！
 夕矢 もうばれちゃったんだからいいだろ。それでもいいのか？ 母さん！
 光一 夕矢、そんな言い方したら三日どころか一生出てこないぞ。
 夕矢 ……なんだよ…。
 光一 どうしたんだよ。そんなに熱くなって。
 夕矢 なんでもない。
 藤実 あのね。実は夕矢さん、来年の春あたりから海外に行く話があったの。
 夕矢 藤実さん。
 光一 海外？ なにそれ？
 藤実 夕矢さんのお店の人がすごいパティシエの人と知り合いで。紹介文書くから向こうで何年か修行してきたらいいって。
 光一 ……すごいじゃない！
 藤実 でもね。
 夕矢 藤実さん。
 藤実 この人、お父さんたちが心配だから行けないって。
 光一 なに言ってるんだよ。なんとかなるって。行けよ。
 夕矢 だから、俺はそういういい加減な考え方が我慢できないんだよ！ 俺が向こうへ行っている間、父さん達になにかあったらどうするんだよ。
 潤一郎 夕矢…。
 夕矢 本当に兄ちゃんが頼りにできるんだったら、俺だってすぐに行ってたよ。
 光一 ……
 葵 ……
 夕矢 ……だから、そのいい加減さが我慢できないって言ってるだろ！ ほんとに休めるの？
 夕矢 ……こんな必要とされてるのに！ やめるならきちんと足を洗ってほしいんだよ。俺は。
 光一 夕矢。
 夕矢 修行の件はあきらめたんだ。
 光一 夕矢。
 藤実 夕矢さん。
 潤一郎 夕矢…。
 夕矢 ……なんだよ。
 潤一郎 親にとつて、一番屈辱的なことが何かわかるか。…自分の子供に遠慮されることだ。
 夕矢 ……
 潤一郎 ……行ってこいよ。まだ大丈夫だ。母さんも、そう思っているはずだ。なあ！
 夕矢 ……出てこないじゃないか。

潤一郎 出てくるさ！ …もう一度さっきのやれば。

光一 大丈夫かよ。

潤一郎 だ、大丈夫だ。

光一 …わかった。父ちゃんはしゃべるな。

潤一郎 え？

光一 俺たちにまかせて。手順はさつきと一緒。

夕矢 兄ちゃん。

光一 おまえもやれよ。困るだろ。母ちゃんが寝室にこもったままじゃ。…静かに！

一同 …。(長い沈黙)

光一 父ちゃん…？ 父ちゃん！ もういいんだって。演技は。起きろよ。今倒れたら、

シヤレにならないだろ！ 父ちゃん！ (合図)

一同 (口々に呼びかける)

光一 母ちゃん！ 出て来いよ。父ちゃん、ほっというていいのかよ！

ゆかり …。

夕矢 ほら、出て来れな…

道雄 ダメだ、そんなんじゃ！

一同 え！？

道雄 頭を下に向ける。気道を確保するんだ。…ちくしよう。心拍数がどんどん下がってる。すぐに救急車を呼んで！ 一刻を争うんだ。早く！ 心臓停止！ 心臓停止！ これから心臓マッサージをする！ えい！ えい！ …素人が体には触るな！ えい！ えい！

良太 道雄…。

光一 父ちゃん！

一同 (口々に呼びかける)

道雄 そうそうとにかく呼びかけてあげてください！ 意識を呼び戻すんです。心を込めて！

一同

光一 (口々に呼びかける)

道雄 呼吸停止、呼吸停止。人工呼吸をやってみる！

光一 母ちゃん。

一同

ゆかり、ドアを開ける。
再び一斉に(潤一郎も)、ゆかりを見つめる。

ゆかり やつぱり…。ウソだと思った。

潤一郎 ゆかり、すまん！！ 許してくれ！

ゆかり なんだあやまつてるの？ なにか…やましいことでもあるの？

潤一郎 いや、それは。

ゆかり また騙されちゃった。バカね。

藤実 そんなことないですよ。

ゆかり でも、あなた(道雄)の声聞いてたら、怖くなってきちゃって。

良太 道雄…。(やったな)

道雄 うん。

ゆかり ちよっと気持ちの整理つかないから。散歩してくる。傘、借りるわね。

ゆかり、ゆつくり居間を出る。

見守る一同。

葵 道雄さん。お手柄！

光一 さすが医学部。

道雄 いやあ、大好きなんだ。ER。

潤一郎 オマエには借りが出来たな。

光一 いいよいいよ。

夕矢 追わなくていいのか。

潤一郎 もちろん追いかけるさ。指輪も探したいしな。

光一 あ、俺も探すの手伝うよ。

夕矢 明日にしなよ。さすがに無理だろ。この時間じゃ。

潤一郎 光一。母さんにはきちんと話をつけておいてやる。

光一 大丈夫かよ。

潤一郎 俺は、借りは必ず返す男だ。心配するな、あれでも、母さんはオマエがかわいいんだ。よく言うだろ。手のかかる子ほどかわいいって。

光一 父ちゃん。

潤一郎 もう少しの間は、父親らしいことさせてくれよ。

光一 ありがとう。

潤一郎 じゃあ行ってくる。

夕矢 もう、浮気しないでね。

潤一郎 もちろん。これで最後にするから、(葵に) メールアドレスを教えてください。

夕矢 父さん！

潤一郎 冗談だ。それじゃ。劇団の皆さん。ありがとう。(良太と道雄に) おまえたちも、

赤石兄弟
...
いい役者になれよ。

潤一郎、出て行く。

光一 (赤石兄弟に) 役者だって。

道雄 いいなあ。

良太 ちよつとやってみるか！

葵 じゃあ、団費が月3500円。学生さんは2000円。細かいことはラインで。フルフルでやるわ。

光一 はや。

藤美 よかったわね。演劇つづけられそうで。

光一 ああ。それにしても、

夕矢 なんだよ。

光一 思ったより若かったな。俺たちの親。

夕矢 兄ちゃんは今わなすぎなんだよ。もう少しでいいから、会ってやれよ。

光一 ああ。

夕矢 でもいつまでも今のままだとは思わないよ。

光一 わかっているよ。今日は帰るわ。

藤美 泊まっていけばいいのに。

光一 やめとくよ。亜希子のうちにも寄って行きたいし。指輪も探さなきゃ。

夕矢 わかった。

葵 じゃあ、私も。

良太 へい、アネさん。

葵 だからアネさんはもういいって。

道雄 へい。
 葵 じゃあ、今日は解散！
 良太 では、本日は大変たのしい時間をありがとうございました。
 藤実 いいえ。
 良太 失礼します。
 道雄 失礼します。

赤石兄弟、帰る。

光一 あいつら、結局最後まで楽しんでいきやがったな。
 葵 ほんとにお金とればよかった。
 光一 葵さん…。
 葵 でもいいわ。これで少しの団費と労働力が手に入った。
 光一 うわあ、役者やらす気ゼロでしょ。
 葵 それは、私が決めることじゃないから。
 藤実 ところで…、どうなんですか、良太君？
 葵 え？
 藤実 あなたのこと好きなんでしょう？
 葵 …ああ。そういえば。
 光一 いいんじゃない、警察官だって？
 葵 だめよ。
 光一 どうして。
 葵 私のお父さん…。殉職しちゃったから。
 光一 (あつさり) ウソでしょ。
 葵 …わかる？
 光一 そりやあもう。
 葵 やっぱだめか。役者は。
 光一 いいじゃない。みんな頼りにしてるよ。葵さんのこと。
 葵 わかってる。
 光一 じゃあ、帰るわ。
 葵 お邪魔しました。
 藤実 また来てね。
 葵 …ぜひ。
 光一 じゃあな。

四人出て行く。藤実と夕矢が残る。夕矢、ソファでぐったりする。

夕矢 …なんだろう。この敗北感は。
 藤実 よかったわね。みんな仲直りして。
 夕矢 どうだか。父さんだって、指輪探すふりしてスマホ探してなきやいいけど。
 藤実 まあ。
 夕矢 なおる見込みがないくらいバラバラに壊れてればいいのに。
 藤実 お茶いれますね。
 夕矢 …手のかかるほど、かわいいか。
 藤実 え。
 夕矢 俺はどうなの。
 藤実 え。

夕矢 俺は、自分で言うのもなんだけど、昔から全く手のかからない子供だった。

藤実 ああ…。

夕矢 俺は、かわいくないのか？

藤実 そんなことないって。

夕矢 なんかむなしいよ。俺。

藤実 …やっぱり行こう？

夕矢 え。

藤実 有名なパティシエのお店。

夕矢 …。

藤実 新婚旅行もしてないんだし。もっと心配させてあげよう。お父さんたちに。

夕矢 ……でも、

藤実 行こう。一緒に。

夕矢 … フランス語、再開するかあ。

音楽。

肩を寄せ合う二人。

以下動きのみ。

いい雰囲気になったところで、指輪を持って駆け込んでくる光一。

「早すぎる！」「うまいこと引かかかってたんだって」「どういうこと？」「だから」という感じの会話をベランダに出て説明する。

ゆっくり暗転。

おわり